
『You're my love』

イナズマイレブン二次創作

冬青なぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『You're my love』

イナズマイレブン二次創作

【Nコード】

N7236L

【作者名】

冬青なぎ

【あらすじ】

2年で同じクラスになった碧衣と照美。

碧衣がたまたま仲良くなった男子はサッカー部のキャプテン。

学校中の女子の憧れの的である彼の名は亜風炉照美くん。

席が近いせいか、学校内でも一緒に行動することが多く、家が同じ方向なのでたまに一緒に帰ったりする間柄。

でも付き合っているわけじゃない。仲の良い友だち。なにかと構ってくる照美は一緒にいて楽しい男の子。

のはずだった。あの日までは…。
(この小説は他サイトにも掲載しています)

プロローグ（前書き）

アフロデイのイナズマキャラバン参加の少し前から…という設定で物語が始まります。

プロローグ

照美とは二年で初めて同じクラスになった。

彼はサッカー部のキャプテンをしている男の子。

ポジションはミッドフィールダー。そして席は私の右斜め前。

通称アフロディ。サッカー部ではそう呼ばれている。クラスの子達も皆そう呼んでいた。

今日もサッカー部は放課後の部活の真最中。

真っ白なユニフォームをまとった部員達がグラウンドを駆け回っている。

帰り支度を終えた私は、1階の渡り廊下からその様子を眺めていた。

照美は男の子とは思えないほどの美麗な容姿を持ち、その華麗なプレースタイルはフィールドにおいて一際存在感を放っていた。

足の速さ、機敏さ、テクニック、シュートの威力、どれをとっても彼の中学サッカー選手としての実力はピカイチだった。

そんな照美の姿を見ていると、神に憑かれているのではないかと考える瞬間がある。

ときおり、そのしなやかな背中から大きな純白の翼が生え、宙に舞い上がり強烈なシュートを放つ…そんな幻が見える。

まるで白昼夢のように光り輝くその瞬間は、あまりにも眩しくて到底現実とは思えない。

だが彼のその美しい姿を眺めていると、もしかしたら本当に何か

人を超えたものが乗り移っているのではないかと思えてしまう。

そんなとき、私の頭に浮かぶのはギリシャ神話の美の女神、アフロディーテの姿だった。ローマ神話のヴィーナスと同格の美の象徴。

ならば、アフロディ……照美は世宇子の美の象徴だと思う。

サッカーをしているときの照美は、特別な存在だ。身体全体から放たれる威圧感に底知れぬ恐ろしささえ感じる。フィールドを駆け回る彼を見ていると、思わずそのプレイから目が離せなくなってしまうのだ。

でも普段は普通の男の子。整った綺麗な顔立ちで、得意な教科があつたり苦手な教科もあつたり。

サッカーをしている姿と普段の姿はまるで別人なのだった。

照美に対する私の思いは、恋愛感情とは違う。

確かにサッカーをしているときの姿は、釘付けになってしまうほど魅力的だ。気になる人ではないと言ったら嘘になる。

彼の真面目な顔、友達と話しているときの楽しそうな顔、サッカーをしているときの厳しい顔、笑ったときの優しい笑顔。どんなときの照美も、素直に素敵だと思える。

だが、照美を見ていると胸が苦しくなるような切なさやドキドキはない。

だからこれは恋とは違うと思うのだ。

だけど、どうしても不思議に思えてならない存在。それが私の中の照美という人…。

モテる男子

サッカー部の部活が終わったようだ。
部員たちは散り散りになって、部室へ戻っていく。

かわいいマネージャー達がその後を小走りに追いかけていくのが見える。

その中の1人が照美に声をかけた。

「アフロディ先輩、お疲れ様でした！」

「ああ、ありがとうね」

照美は、渡されたタオルとスポーツドリンクを受け取った。
ニツコリと笑顔を向けられたマネージャーは、モジモジと恥ずかしそうに上目遣いの笑顔を返している。

部員ならば誰でも知っている。彼女は照美に夢中なのだ。
いや、彼女だけではない。照美を好きな女の子は、この学校中にたくさんいる。

グラウンドを見渡せば、サッカー部の部活見学をしているのは殆どが女子だ。

きやあきやあと黄色い声援は、部活のはじめから終わりまで続く。

うるさくて集中できないんじゃないかしら？と苦笑いしたくなる

ほどだ。

部室に戻った部員たちは、しばらくすると制服に着替えて出てきた。

私の姿を見つけた照美がゆっくりとにこやかに近づいてくる。先ほどまで走り回っていた疲れは少しも見えない。

「やあ、碧衣。見ててくれたの？」

「見てたっていうか……暇だから眺めていただけ。ていうか、人間観察？」

私はさほど興味なさそうに返した。

「誰の？」

「サッカー部見学女子の。だって、面白いんだもん。みんな照美目当てで来てる子ばかりだよ。あんな風に騒がれるのってどんな気持ち？ やっぱ嬉しい？」

「見学女子を見学してたの？」

驚いたように言うと、照美は少し考え込むようにして首を傾げた。

「うーん、どうかな……。別に僕は周りのことは気にしてないけど。サッカー部を応援してくれるなら嬉しい」

いけどね」

「ふうん、そうなんだ」

「で、僕のことは見ていてくれた？」

「そうだね…。眺めていたよ」

「そういうのを見てたっていうんだよ、素直じゃないなあ碧衣は」

照美はがっかりしたようだったが、気を取り直したように明るく言った。

「まあいいや、一緒に帰ろうよ、部活が終わるの待っててくれたんでしょ？」

「別に待ってたわけじゃないよ。それに、嫌だよ。照美と一緒にいたら、ファンの女子たちに睨まれちゃうでしょ」

私は素っ気無く返した。

「なんだ、冷たいね、今日の碧衣は。いいから行こう？」

なおもしつこく誘ってくる照美に嫌とは言えず、少し離れて歩き出した。

彼が嫌いなわけじゃない。むしろ好感を持っている。
男の子として、というよりもクラスメイトとして。

綺麗で優しくて……。なんて、男の子に対する形容じゃないけど。

好きなひとがいる

「……なんで碧衣はそんな後ろを歩いているんだい？」

振り向いた照美が不思議そうな顔をしていた。

「あなた、本当に分かってないの？照美って女の子にメチャクチャ人気あるんだよ？そのモテモテ君と一緒に歩いてたら面倒なことになるじゃない。ほらほら、今だって後ろから女子がわんさかとついてくるわよ？」

私はそつと後ろを盗み見た。言っているそばから、群れをなして歩いてくる女子軍団の姿が見える。どうせ照美の追っかけだろう。

「そうかなあ……。僕はそうは思わないけど？それに、後ろからついてくるんじゃないくて、帰る方向が同じだからなんじゃない？ね、碧衣が今日はなんだか冷たいのはそのせいかな？もしかしてヤキモチ、とか？」

そういつて、嬉しそうにクスッと笑った。

「やきもちって！何言ってるのよ！」

持っていたカバンで照美の背中を叩く。

否定しようとしたが、楽しそうに逃げ回る照美を見ていたら、そういうことにしておいてもいいかな？という気になった。

「大体さ、不特定多数の女の子にモテるのって意味あると思うかい？その全員と付き合うわけじゃないのに。僕はただ一人の人を好きでいられたらそれでいいし、その人から同じように好きだと思ってもらえたら幸せだよ」

と言ってニコリとして見せた。

「へえ…。案外マトモなこというのね」

「何言ってるんだい？僕はいつだってマトモだよ？碧衣は僕のことをどんなヤツだと思ってるんだ？」

そういつて、長めの前髪をゆらりと振り払った。そんな照美を見ていたら、何も言えなくなる。

そうかな。

マトモなのかな。

私には、照美はどこか人間離れした存在に見えるんだ…。そんなこと、口にできないけど。

「照美はさ、女の子に騒がれるのってあんまり嬉しくないんだ？」

ちょっぴり気になっていたことを訊いてみた。

「嬉しくはないけど、それで僕の何かが変わるわけじゃないから。僕には好きな人がいるし、さっきも言ったように、その人から好きだと思ってもらえたらいいなって思うだけさ」

「わあ、初耳！いるんだ？好きな人。意外！照美って毎日サッカーばかりで、女の子には興味ないのかと思ってた」

「いるよ。1年のときからずっと好きだったし」

ちょっと茶化してみようか、とイタズラ心が湧いたが、照美のあまりの真剣な眼差しにたじろいでしまった。

一年のときからってことは、前に同じクラスだった子なのかな？皆の憧れの男子に恋をさせている女の子って、いったいどんな子なんだろう。

少し気になる。

「ねえ、その子に告った？」

「告ってないよ…。なかなかそういう雰囲気にならなくてさー。一生懸命アピってるのに全然気づいてくれないんだよね」

照美は照れくさそうに笑った。

恋、してるんだ。ちょっと羨ましいな。私にはまだそういう気持ち分からないから。

照美の好きなひと

「アピってばかりいないで、告ってみればいいじゃない？その子だって、相手が照美だったら即オツケーかもよ？ていうか、照美ファンの一人だったりして」

私は冷やかしたつもりだったが、照美は乗ってこない。

「じゃあ、もしも碧衣は僕だったらオツケーなの？」

「え？……」

「そんな顔しないでよ、照美だったら即オツケーとか言うからさ。碧衣もそうなのかな？って思っちゃった」

意外に思いつめた感じだったので、それ以上追求するのはやめることにした。

恋って一筋縄じゃないかなんだろうな。照美でさえ、そういうことで悩んだりするんだから。

「好きな人かあ、いいな、そういうの。1年のときからずっと好きだったなんて、照美って案外一途なんだね。私、何でも相談に乗るよ。協力してあげるね」

照美は少し困ったように曖昧に笑った。

それからは何か考え込むように黙ってしまったので、二人とも黙々と歩き続けた。

でも、照美がその子と付き合うようになったら、私はこうして一緒にいられなくなるんだな。

彼女にしてみれば、彼氏の女友達なんて邪魔以外の何者でもないもんね。

それはそれで寂しいかも…。

そうしているうちに、いつの間にか家の前まで来ていた。

「あ、もう着いたよ。じゃ、また明日ね」

私は家の門を開けて中に入ろうとした。

「うん、またね」

照美は私が玄関を開けて中に入るまで、その場から動かなかった。

「ただいま」

両親は共働き、大学生の姉はここには住んでいない。

だから帰るといつも一人。『ただいま』への返事はもらえない。それでもその挨拶を欠かさないのは何故だろう。

リビングのソファにカバンを置くと、冷蔵庫から麦茶を出して淹れた。

飲みながら考える。

照美に好きな人がいたなんて、全然気づかなかった。

いつも近くにいたのにどうしてだろう。人間観察は得意なのに。

該当しそうな女子を何人か思い浮かべてみたが、その誰もが当てはまらないような気がする。

好きってことは、当然付き合いたいってことなんだよね？誰かと付き合ってる照美：なんか想像できないな。

付き合うってどういうことなんだろう。

手を繋いでデートとかしたり、一緒にご飯食べたりするのかな。

キスしたり抱き合ったりとかもするのかな。

でも、あんなにカッコ良くて優しい男の子だったら絶対彼女は幸せだよね…。

「さてと、夕飯の準備でもするかな」

母は仕事で帰りが遅い。夕飯の支度と洗濯物は私が担う家事だった。

私の中の小さな変化（前書き）

少しでも雷門中とエイリア学園に触れます。

私の中の小さな変化

どこか遠くでサイレンが鳴っている。私がいるのはどこなんだろう？

サイレンはどんどん近づいてきて、耳元でうるさいくらいに鳴り響く。

そこで急に目が覚めた。サイレンだと思ったのは、けたたましくなる目覚まし時計のアラームだった。

六時。

カーテンから差し込んだ朝日が柔らかく煌いている。

ベッドからむくりと起き上がると、少し動悸を感じた。

何か、夢をみていたような気がする。でも内容は思い出せない。

少しずつ記憶から遠ざかっていく夢の尻尾を捕まえることができずに、私はベッドから抜け出した。

「おはよう、碧衣」

登校中、クラスメイトの理紗が声をかけてきた。

「理紗！おはよう」

「ねえ、碧衣、雷門中って覚えてる？」

「雷門中……。ああ、フットボール・フロンティア決勝戦でうちに勝った学校でしょ？覚えてるよ」

無敵と思えるほどに強かった世宇子を後半で一気に覆したチーム。それが雷門イレブンだった。

「その雷門中がとんでもないことになっているらしいよ？」

「どういうこと？」

私たちは歩きながら話した。

「よく分からないんだけど、エイリア学園というのが宇宙から来て、各地の学校を破壊して回っているらしくて……。で、それを阻止するために雷門中のサッカー部がサッカーで戦っているんだって」

「何それ。じゃ、そのエイリア学園というのは宇宙人なわけで、雷門中はその宇宙人とサッカーしてるの？」

宇宙人がサッカーって。一体どんなカタチの宇宙人なんだ？そもそも宇宙人はサッカーができるのかしら？

私は前に何かで見た、タコみたいに足がたくさんある火星人を思い浮かべていた。

もしもそうなら、さぞかしリフティングが上手いことだろう。

「私も詳しくは知らないんだけどね、そういうウワサだよ。だって、宇宙人って……どうなのよ？」

「ちょっと信じられないね。宇宙人だなんて、得体が知れなくて気持ち悪いよ。ていうか本当に宇宙人なの？」

「さあね。宇宙人なんているのかな」

「それより、理紗。普段は彼氏とどんなことしてるの？学校終わってからとか、休みの日とか」

私がいきなり話題を替えると、理紗は目を丸くした。

「なあに？突然。もしかして、とうとう告られちゃって付き合うことになった、とか？」

「告られた？私が？誰に？」

「なんだ、違うの？碧衣ってさ、人のことはよく観察しているくせに、自分のことは全っ然わかってないよね」

理紗は、なあんだ、とガツカリしたように肩をすくめた。

「何それ？もしかしてバカにしてる？」

「そうじゃないけど。碧衣のそういうところ、可愛くて好きだよ」

「もうっ、理紗からかってるでしょ！」

「じゃ、教えてあげる。普段は一緒に宿題やったりとかかな。あとマックとかミスドとか、カラオケ行ったりもするよ。でも、お金ないからほとんどどっちかの家だよ。この間の日曜はデイズニールンドに行ったけどね。でも、告られたんじゃないならなんでそんなことに興味あるの？」

「照美がね、好きな人がいるんだって。何かさ、私は彼氏いないからわからないけど、付き合ったらどんな風に過ごすのかなって思ってたさ。ていうかさつきから告られたって、そればかり。一体何？私に告るような人に覚えがある、とか？」

「まあ、あるといっちゃあるけど？アフロデイ、とうとうカミングアウトしたんだ！てかさ、碧衣マジで超ウケるんだけど！面白すぎ！」

そう言うのと、プツと吹き出した理紗は、しまいには身体を丸めてゲラゲラ笑っていた。

「ええ？誰なのよ、教えてよ！何で笑ってるの？」

「教えられないよ、自分の胸に手を当ててよく考えなさい！」

その後も理紗は、あはは、碧衣おかしー！ウケるー！と一人で笑っていた。そんな話をしているうちに、学校に着いた。

教室に入り自分の席に着くと、昨日の照美のセリフが甦ってきた。

『僕には好きな人がいるし、さっきも言ったように、その人から好きだと思ってもらえたらいいなって思うだけさ』

好きな人、か。

それを聞いたときから、私の中で小さな変化が始まった。

照美は友達で、話していて楽しい。

でもそれは照美が男子だったことは関係なくて、むしろ仲良くなった子が男子だったっていうだけのこと。

好きな人がいるってことは、当然相手は女子なわけで…それはつまり、照美が男だってことだ。

当たり前だけど。

…。
なんだろう、私は昨日から照美のことばかり考えているような

…。
ごちゃごちゃと考えを巡らせていると、朝練を終えて制服に着替えた照美が教室に入ってきた。

「碧衣、おはよう」

照美はいつもと何も変わらない。

「おはよう…」

だけど、私は少し変。何だか意識しているみたい。

照美の男な部分を見せられて、複雑な心境なのだ。

変だな、私。別に私のことが好きって言われたわけじゃないのにね。

帰り道

その日は朝から一日中照美ばかり見ていた。

こうなったら、絶対に照美の好きな人を突き止めて驚かせてやる！と意気込んだが、どうにもそれらしき女子が分からない。

そんなに好きな人なら、照美は必ずその人のことを見ているはず。

だが、さっぱり分からない。

同じクラスじゃないんだろうか。

ただ、私が視線で追っているせいか、いつもより多く目が合った。そのたびに照美はニコッと笑ってくれる。

うう、くやしい、分からない…。

放課後、照美が声をかけてきた。

「今日部活ないから帰ろう？」

「うん…」

「何？碧衣。今日ずっと僕のこと見てたでしょ」

「あ、ばれてた？くやしいけど、わかんなかった、照美の好きな人。」

絶対突き止めてやるって思ったのに。照美が誰を見ているのかずつと観察していたんだけどなあ」

すると、照美はさもおかしそうに笑った。

「碧衣、それは無理だよ。今日一日そんなこと考えてたの？そんなに知りたい？」

「知りたいっていうか、突き止めて驚かせたい」

「そういうの、碧衣らしくて可愛いなあ」

「あ、またばかにしてる。何か、今日はみんなにからかわれる日だわ。理紗とか」

「ばかにしてないよ。でもさ、僕のことずっと見ていて何か分かった？」

「ううん、分からなかった」

「そう、残念」

「何で？」

「なんでもないよ」

いつになく、照美は楽しそうにしていた。

「碧衣は部活やらないの？何かやれば？やりたいのがないなら、サッカー部のマネージャーやらない？」

私はとんでもない！と首を振った。

「マネージャー？いっぱいいるじゃない、9人もいたら充分でしょ？そのうち、あと2人増えてマネージャーだけで一チームできるわよ」

かもね、と照美は笑った。

「それに私、帰ったら夕飯作ったりしないといけないんだよね。お母さんの帰りが遅いから。部活でくたびれて帰ってきたら夕飯作れないじゃん？」

「碧衣って、いつも夕飯つくってるの？じゃ、料理得意なんだ？」

照美はへえっと感心したようだった。

「じゃあ、弁当も自分で作るの？」

「まあね」

そんなに感心されるほど大したことではない。

「今度僕の弁当も作ってよ」

「そういうのは彼女に作ってもらえばいいじゃない。ていうかさ、さっさと告っちゃいなよ。照美に言い寄られて断る子なんていないよ、絶対」

「本当にそう思ってるの？」

「思う思う！絶対うまくいくよ！でもそうになったら、私ちょっとさみしいかも。こうやって一緒にいられなくなるでしょ？」

「じゃあ、告るのやめておこうかなあ…」

そんな話をしながら歩いていたら、いつの間にか家の近くまで来ていた。

家に2人きり

「もう着いちゃった。ねえ、ちよつと寄ってお茶でも飲んでいかな
い？」

なんだか今日は照美と話しているのが楽しくて、もう少し一緒に
いたい気分だった。

「いいの？ 上がって」

「いいよ、誰もいないから気にしないで」

「誰もいないからって…僕が碧衣を襲っちゃうかもよ？」

「有り得ない。ていうか、照美ってそういうキャラじゃないでしょ
？ いいから上がりなよ」

「それじゃ、お邪魔します」

私は照美を先に玄関に押し込むと、後から入ってドアを閉めた。
正直に言うと、少し照美を男の子として意識してしまった今日、
家で二人きりになるのはまずいような気がした。

でも、もう少しだけ話していたい。

何故だか今日の帰り道はいつもより短い気がして。

照美をリビングのソファに座らせると、お茶を淹れにキッチンへ立った。

「コーヒーでいい？」

「何でもいいよ」

私はミルを取り出すと、コーヒー豆を入れてゴリゴリと挽き始めた。

いつも自分で飲むのはインスタントだったが、来客のあるときは豆から挽いたものを出していた。

淹れたコーヒーをトレイに乗せて運んでいくと、照美は窓際に立って庭を眺めていた。

サラサラの髪が西日に照らされてキラキラと輝いている。その横顔を見て、やっぱり綺麗な人だなと改めて思った。

ふと背中を見ると、一瞬だけあの翼が光ったような気がした。

「コーヒー、どうぞ」

「ありがとう」

窓辺を離れた照美はソファに座りなおした。

「碧衣は、いつも家に帰ってくると一人なんだね、僕と同じだ」

「そうなの？」

「うん…」

それきり照美が黙ってしまったので、私たちは静かにコーヒーを飲んだ。

「僕はね、何度か碧衣に言おうとしてやめたことがある。今なら言えそうな気がするんだ。聴いてくれるかな」

照美が神妙な顔で何か言いかけたが、タイミング悪くキッチンの電話が鳴った。

「ちよつとごめんね」

電話に出ると、母の甲高い声が飛び込んでくる。

『碧衣、ごめんねえ。今日残業になっちゃったの。遅くなるから夕飯は自分の分だけ用意して食べちゃってちょうだい。お母さんはこっちで食べるから』

「そう、わかった。じゃそうする。うん、大変だね、お疲れさま。うん、じゃあ頑張ってるね」

電話を切った後、私は照美の方を見た。何を話していたんだっけ？

「電話、誰？」

「母よ。今日は残業で遅くなるんだって。そうだ、ね？夕飯、うちで一緒に食べない？どうせ帰っても一人なんでしょ？」

「え？いいの？」

「いいよ、だって作っても一人で食べるんじゃ余っちゃうし」

誰にも渡したくない

「キッチンに立ってる碧衣、かわいいなあ」

リビングにいる照美が対面式キッチンの向こう側から話しかけてきた。

私はエプロンを付けてベーコンを刻みながら赤くなった。

「だから！もうからかわないでってば」

「からかってなんかいないよ、だって本当にそう思うんだもの。何か、手伝おうか？」

そういうと髪を無造作に束ね、ワイシャツの腕をまくってキッチンに入ってきた。

袖から覗く長い腕からは、皮膚の下の青い血管が浮き出て見えた。

その先にある大きな手。

男の子の腕だ、と思うと急にドキリとした。

「貸して」

フライパンを握った照美は、刻んだベーコンをオリーブオイルで炒めながら、ボウルに材料を入れて混ぜ始めた。

私は鍋にお湯を沸かす。

ベーコンの焼けるいい匂いが漂いはじめた。

照美と並んで自分の家のキッチンに立っているなんて、何だか気恥ずかしい。

普段は見せない学校以外での彼の姿に、新鮮さと驚きと少しの憧れを抱いた。

その横顔に声をかける。

「照美、お料理なんてできるの？なんかカッコイイね。厨房男子！」

「僕のこと、碧衣がカッコイイって言ってくれたの、初めてだね」

振り向いた照美は、ちよつと照れたような笑顔を見せた。

「新婚さんってこんな感じかなあ。こうして二人でキッチンに並んで料理したりしてさ。碧衣ならどっちがいい？料理を手伝う男じゃない男」

「ええっ？どっち…ていうか、新婚さん！？私、まだ中学生だよ？そんな先のことなんて考えたことないよ」

やだ、照美、何言ってるの？家に二人きりで、しかも新婚さんとか言っちゃって。

今日の照美は変だよ？

「あ、碧衣、赤くなってる！今日はいつもの碧衣らしくないね。いつもだったら素っ気なく返してくるのにさ。あ、もしかして想像しちゃってる？僕と碧衣の新婚さん」

なんて、恥ずかしい。全部見透かされている？

どういうわけか、家に入ってからいつもと風向きが違う。終始、照美のペースに乗せられっぱなしだ。

いつもは自分のペースに照美を巻き込む感じなのに。

でも、それも悪くないような気がした。

照美にからかわれている私。

今までとはちょっと違うけれど、そんな時間も楽しいと思える。

そのとき、ふいに強い思いが私の胸を襲った。

渡したくない。この人を誰にも。

例え照美が誰を好きだろうと、構わない。

今までみたいにな、こんな風にふざけあいながら私はこれからもずっと一緒にいたいんだ……。

照美にこんな気持ちを抱いたのは初めてだ。

一旦そう思ってしまったら、もうどうすることもできない。

他のことを考えようとしても、その思いに縛られて、照美が何か話しかけてきても満足に返すことすら出来なくなっていた。

初めて抱いた気持ち

気がつくと私たちは並んで食器を洗っていた。

「ごちそうさま、美味しかったよ」

「ありがとう、でも殆ど照美が作ったような…」

「そんなことないよ、碧衣の料理が食べられて嬉しかったよ」

照美は目を細めて微笑んだ。

何を食べてどんな味だったのか、いったい何を話していたのか、さっぱり覚えていない。

良く分からないうちに食事が出来上がり、そして食べ終わっていた。

洗い終えた食器を拭き上げると、照美が乾いた声で私の名を呼んだ。

「なに？」

振り向こうとしたその瞬間。

「！」

「少しだけ、こうしていてもいい? ……何もしないから」

突然のことに声も出ない。

照美…どうして…。

私は、背後から包み込むように抱きしめられていた。

嫌だ、照美…。好きな人、いるんでしょ? こんな風にされたら私…。

「て……るみ…?」

震える声を絞り出すのが精一杯だった。

その先を続けることができない。

私の首筋に照美の髪が触れる。

目を閉じて、抱きしめたその腕にそつと手を添えた。

まだ少し水滴の残る冷たい腕は力強かった。

不思議な感動が私の全身を貫く。

照美の腕の中は、気が遠くなって倒れそうなほどに心地良い。ずっと、こうしていたい…。

そのとき、私のなかでおぼろげだったものがはっきりとした確信に変わった。

こんなにも好きだ、照美のことが。
とても好きでたまらない。

大好きだよ…。

どうして今まで気付かなかったんだろう。
一緒にいるのがこんなに幸せだって。

お願い、誰のものにもならないで……。

今、この瞬間にそうなったのか、あるいはずっと以前からそうだったのかは分からない。
だが、そんなことはもうどうでも良かった。

今、ここでこうしている私は照美が好き。
そして私は照美の腕の中にいる。
その事実には私は陶醉していた。

でも。照美には好きな人がいる。
それなのにこんなことをするなんて……。

私はきつく目を閉じた。

まるで、現実をみつめることを拒むかのように。

私はどうしたらいいの？こうなってしまった気持ちはいったいどこへ隠せばいい…？

「碧衣、ごめんね」

そういつて、照美はそつと腕を解いた。

「……」

お願い、アヤマッタリシナイデ。

何も答えられない。

ただ、胸の鼓動だけが早鐘のようにいつまでも続く。

乱された心

「じゃあ、僕は帰るよ」

照美は束ねていた髪を解いた。

「うん…」

何とか平静を装った私は、取り乱していた心を見透かされないようにするのにも必死だった。

玄関を開けると夜の闇が広がっていた。

「もう真っ暗になっちゃった……。気をつけて帰ってね…」

私はかき乱された心のまま、抑揚のない声で言った。

「大丈夫だよ、僕は男だから」

照美はお邪魔しました、と言って玄関を後にした。

「碧衣…」

照美が振り返って私を呼び止めた。

「何？」

「いや……なんでもないよ。またね」

何か言いたそうな雰囲気だったが笑顔で手を振るので、私も振り返した。

あんなことしておいて、どうしてそんなに普通に普通でいられるの？

玄関のドアを閉めると、耳が心臓になったのかと思えるほど鼓動が間近に響いていた。

照美の腕の中はとても温かかった。
行く手を遮る何もかも、あらゆること全てから守ってくれるような幻想を抱いた。

あれは、本当に現実だったの？

それとも白昼夢だったのだろうか。

あの白い翼が見えたときのように…。

私はへなへなど、腰が抜けたように玄関に座り込んでしまった。

動悸が緩やかになるのを待って、のろのろと立ち上がった。

風呂場へ行くとバスタブに熱い湯を溜めながら、頭からシャワーを浴びた。

固まっただろう人形のように、身じろぎ一つせずに。

照美…。

私は自分の肩を両腕で抱きしめた。

ここに照美の腕があった…。私を抱きしめた腕。

勢いよく流れ落ちる、シャワーの床を打つ音だけが響き続けていた。

あなたを知らない私

風呂からあがり、自分の部屋へ行く頃にはようやく落ち着きを取り戻していた。

明かりを消した部屋でベッドに横たわり、照美のことを考える。

照美は電話がなる前に何か言いかけた。
別れ際にも何か言いたそうにしていた。

酷く混乱していた私は聞きだすことさえ出来なかった。

何だったのだろう。

そういえば、私は照美の家を知らない。

同じクラスになってから何度も一緒に帰ってきているにもかかわらず、訊いたこともない。

方向が一緒だからと言っていたが、私のほうが先に家にたどり着くのでいまだに照美の家を知らないままなのだ。

今までの私は、それほどまでに照美に対して関心を持っていなかったのだろうか。

我ながら、改めてその事実に愕然とする。

それはそうだろうな。

照美に好きな人がいたことすら気づかなかったのだから。理紗でさえ何か知っている様子だったのに…。

次の日、照美は学校に来なかった。斜め前の席がポカンと空いている。

昼休み、理紗が屋上でお弁当を食べよう、と誘ってきた。

「碧衣、アフロディが休みなんて珍しいね。相方がいなくて寂しいんじゃない？」

理紗がアフロディと言った瞬間、胸の奥がズキリと痛んだ。

「相方…ねえ」理紗は私と照美をそんな風に見ているのか。

「だって、あんた達って見ると面白いんだもん。それっていいコンビってことでしょ？だから相方！」

どこまでも高く広がるスカイブルーの空は、遠くに柔らかな雲を一つ浮かべていた。

照美は今どこにいるんだろう。

その次の日も、そのまた次の日も照美は学校を休んだ。

そうして、照美が休むようになってから一週間が過ぎた朝、私は妙な夢を見た。

照美が病院のベッドで寝ている夢。

ベッドから起き上がった彼は、窓から外を眺めていた。

その窓越しに見えたのは、夕暮れの川原と鉄塔らしきもの。

職員室

私は何かいやな予感がして、登校早々職員室に駆け込み、挨拶もそこそこに担任を質問攻めにした。

「先生。照美、もう一週間も休んでますけど、どうしてか知ってます？風邪とか？何か悪い病気とか。

それとも何かあったんですか？事故、とか…」

担任はあごに手を当てると首を傾げた。

「そうなのよね…本人からしばらく休むという連絡はあったんですけど、理由ははっきり聞いていないから心配しているのよ」

「そうですか…先生にもわからないんですか。あの、変なこと訊きますけど、鉄塔が見える川原ってどこかわかりますか？」

自分の夢について誰かに尋ねるなんて馬鹿げていると思う。それでも訊かずにはいられない。

「分からないわ。何？それは亜風炉くんと何か関係あるのかしら？」

「いいえ、何でもないです」

まさか夢に出てきた風景だなんて突飛過ぎて言えない。

「ねえ、綾瀬さんこそ何か聞いていないの？ 亜風炉くんの彼女なんでしょ？」

「！」

私は耳を疑った。

「え？ かの…？」

彼女って言った？

「違うの？ だって、亜風炉くんと普通に喋ったり一緒に帰ったり、仲良さそうにしている女子って綾瀬さんくらいよ？ それに照美って呼んでるのもあなたくらいでしょ」

確かに、照美は女子たちの憧れだから遠巻きに熱い視線を注いでいる子がほとんどだ。

普通に話しかけるような女子は滅多にいない。

「それは、友達だから…ていうか！ 先生なんで私が照…アフロデイトと一緒に帰ったの知ってるんですか？」

「ヤダア、先生だけじゃないわよ、みんな知ってるわよ、女の子たちって噂好きだから。亜風炉くんも
マメよね。好きな女の子を家まで送って帰るなんて」

先生は肩をすくめて呆れた、という顔をした。

突然、最後に一緒に帰った日の夜の出来事が頭の中で再生される。
あんなことの後だから、恥ずかしさでいたたまれない。

「でもいいわよねえ。今どきの子たちって、ちょっと羨ましいな。
あ、先生がこんなこと言っちゃいけないわよね？」

先生はちょっと周りを気にするように見渡すと、声のトーンを落としてささやくように続けた。

「先生が中学生だった頃なんてさ、卒業式に第二ボタンを渡すとか貰うとか、そういうレベルだったわよ？告白なんて、一大事だったんだから！それが今じゃ中学生カップルなんて当たり前。時代は変わったわよね」

そう言って、先生は遠い目をした。

私は一人で喋りまくる先生の話についていけない。

何て言ったの？好きな子を送って？

ああもう、先生を巻き戻したい。

「あ、あ、あの、カ、カップル……ですか？私と……照美が？あのいや、その……いつからそんな……？カップル……じゃないですから。ていうか、好きな女の子って……だって照美には……」

声が裏返り呂律も回らない。なんてみっともない私。

「まあまあ、落ち着いてね。先生、中学生が付き合っちゃダメって言ってるわけじゃないのよ」

先生はちよつと苦笑いしながら言った。

好きな女子？照美が私を？

だって、照美には好きな人が……。

好きな人が？

そこまで思い巡らせて、ふと理紗の声がよみがえる。

二つの何かがピツタリ重なった。

『さつきから告られたって、そればかり。一体何？私に告るような人に覚えがある、とか？』

『まあ、あるといっちゃあるけど？アフロデイ、とうとうカミングアウトしたんだ！てかさ、碧衣マジで超ウケるんだけど！面白すぎ！』

『教えられないよ、自分の胸に手を当ててよく考えなさい！』

うそ…そんなことって。私、ばかみたいだ。どうして分からなかったの？

照美…。一体どこにいるの？確かめたい。
でも、きつとこんな私じゃない加減愛想尽かしてるよね…。

「先生、私、照美の家を知らないんです。電話番号だって」

「何？じゃ本当に彼女じゃないわけ？」

「じゃないわけ、です」

私は苦笑った。この期に及んで何だか虚しい。

気づいてしまった気持ち

照美とよく話すようになったきっかけは、二年のクラス替えで出席番号が近いせいだった。

亜風炉と綾瀬。

最初は席も隣同士だったし、気軽に話しかけてくるので普通に接するようになった。

他の女子たちが照美に抱く憧れとは、だから最初から違うのだった。

確かに、周りからは照美とはいちばん仲の良い女子だと思われるいるかもしれない。でも私たちは、本当にただの友達。

ほんの一週間前まではそう思っていた。

女子の仲良しが理紗なら、男子は照美だった。不思議なことに異性という目で見てはいなかった。

確かにサッカーをする姿に惹かれてはいたし、カッコイイ男の子には違いない。でも距離が近すぎて、何も見えていなかった。

一年のときから好きだった人。あれは、私のことだった…？

なんて取り返しのつかないことをしたのだろう。長い間、ずっと照美を傷つけていたのかもしれないと思うと、余計に胸が疼いた。

今までの照美の姿がフラッシュバックする。

新学期の日の朝の教室。

『君のことは知ってるよ。綾瀬碧衣でしょ？よろしくね。僕のこと
は照美って呼んで』

授業中、ぼーっとしていた私が指されたとき、そっと答えを教え
てくれた。

『碧衣、答えは○×△※だよ』

好きな人がいると教えてくれた。

『いるよ。1年のときからずっと好きだったし』

『そんな顔しないでよ、照美だったら即オッケーとか言うからさ。
碧衣もそうなのかな？って思っちゃった』

『ばかにしてないよ。でもさ、僕のことずっと見ていて何か分かっ
た？』

『サッカー部のマネージャーやんない？』

『今度僕のお弁当も作ってよ』

『碧衣、見ていてくれたの？』

『素直じゃないなあ、碧衣は』

『もしかしてヤキモチ、とか？』

そしてあの日……………。

『少しだけ、こうしていてもいい? ……何もしないから』

それなのに、私は何て言っただろう。

『1年のときからずっと好きだったなんて、照美って案外一途なんだね。私、何でも相談に乗るよ。協力してあげるね』

『そういうのは彼女に作ってもらえばいいじゃない。ていうかさ、さっさと告っちゃいなよ』

これじゃ、どっちもまるで「あなたは私の眼中にない」って言ってるみたい。でも今更後悔してもどうにもならない。あの時の私の気持ちは、まだ友達でしかなかったのだから。

いつも私の名を呼んで、そしていつも私の傍にいてくれた。いつもふざけて、笑って、からかって。

たくさん言葉。笑顔。

照美の好きな人は、他の誰でもなかった。

『碧衣、それは無理だよ』

好きな人、見つけられるわけないよね。本当におかしい。どうかしている。

照美はどう思ったんだろう。笑っていた。楽しそうだった。こんな私で良かったのかな。

今になって思い出すのは、何度か照美が私に何か言いかけたこと。でも私はきちんと耳を傾けなかった。

聴いてあげられなかった。

こんな私には、きっと言えなかったんだ。

その日の授業はずっと上の空だった。何を聞いても頭に入らない。照美がいない教室。窓の外ばかり気になる。

『本当は個人情報保護法っていうのがあって、先生からは教えられないんだけど、今回だけ特別ね。絶対他の子には内緒よ』

そう言って先生は、照美の住所と電話番号を書いたメモをくれたのだった。

「碧衣、今日はずっと元気ないね？ やっぱ、あれ？ 最近アフロデイがないから？」

「え？ああ、そっか。授業おわったんだ…。ゴメン私、行くところがあるから先に帰るわ」

急いで帰り支度を済ませると、心配顔の理紗を残して教室を出た。

「待ちなよ！碧衣！」

後ろから理紗の大声が追いかけてくる。急ぎ足で歩く私の腕を乱暴につかんだ理紗は、「碧衣、待ってよ」と言った。

「ねえ、碧衣。アフロディと何かあったんじゃないの？」

…さすが彼氏のいる子は勘が鋭い。

「どういう……？」

私はごまかそうとしたが、理紗の目は節穴ではないようだ。観念して、ことの一部始終を話した。

「理紗は知っていたんだね」

「そうよ、随分前からね。碧衣ってなんて天然で鈍い子なんだろうって思ってた。周りのことはよく見ているくせに、自分のこととなるとサッパリなんだもの。私はそういう碧衣のことが好きだけだね。黙ってるの、結構つらかったよ。ああー！やっとヤキモキから解放されるわ」

「理紗……」

やっぱり親友だ。私のことを良く見ているし、照美のこともしっかり分かってる。

理紗は私より全然大人だなあ…。

「行くんでしょ？」

「うん」

「絶対！ 幸せになりなよ」

理紗はガッツポーズをして見せた。

会いたいときには…

照美の家は、予想に反して私の家と同じ方向ではなかった。

正門を出て左へ行くと私の家。

先生が書いてくれた住所へ行くには右へ行かねばならない。

市内だけど、行ったこともないところだ…。

一旦家に帰ってから自転車で行くべきだろうか。だが、一刻も早く会いたい。会わなければならない。胸騒ぎが収まらないから。

一度家に帰るなんてもどかしい。

私はカバンを抱えて走り出した。

知らない道を迷いながら散々歩き回って、やっとたどり着いた頃には暗くなっていた。

「亜風炉…。間違いないわ、珍しい苗字だし」

躊躇することなく、門の脇にあるインターフォンを押した。

「……………」

応答がない。

暫く待って、もう一度押した。だが、やはり応答はない。

門には門錠がかけられている。ためしに外れるか回してみた。錠はガチャガチャと派手な音を立てる。

案の定外れない。

仕方なく家の周りをうろついてみた。だが、家の中に灯りは一つもついておらず、人のいる空気が感じられない。

なんか私、これじゃ不審者みたいだよ…。

もう一度インターフォンを押した。今度はスピーカーに耳を当ててみる。

だが、静まり返ったスピーカーの向こうに繋がる気配はない。

四度目を押そうとして、諦めた。

どうしよう…。こんな遠いところまで来て、しかもクタクタでこ

れ以上歩けそうもない。

照美の家はこんなに遠かったんだ…。

部活が終わって疲れてるはずなのに私の家まで一緒に歩いて、それから来た道に戻って…。

考えたら涙がこぼれた。

それなのに、私は少しも分かってあげられなかった。いつも素っ気無かった。

きっとたくさん傷つけたよね。照美はいつでも素直で優しい人だったのに。

ごめんね、照美。今更、都合が良すぎるよね。

『いいよ、碧衣。僕なら大丈夫さ』

照美の声が聞こえたような気がした。

戦いの後（前書き）

ここから照美の視点でのお話になります。

今後は、碧衣と照美の視点が何度も入れ替わりながらストーリーが進みます。

戦いの後

僕はエイリア学園、カオスとの戦いで不覚にも負傷してしまった。

試合の途中、突然空から降ってきたエイリア学園のボールに吹き飛ばされたところまでは覚えている。

それから先はわからない。気がついたらこの病院のベッドに寝ていた。

目が覚めたときに、真っ先に目に入ったのはキャプテンの円堂君の姿だった。ずっと僕に付き添っていてくれたようだ。

外の空気が吸いたいと言うと、円堂君は屋上まで肩を貸して連れて行ってくれた。

「本当に寝てなくて大丈夫なのか？」

「もちろんさ、これくらいの傷」

それはウソ。強がりだ。

本当はかなり痛む。立っているのも辛い。

僕はベンチに倒れ込むように座った。

「すまなかったなアフロディ。俺達に力がないばかりにお前をこ

んな目に合わせちまって」

円堂君らしくもない、しんみりとした顔。

いつも前向きな君のそんな顔は見たくないな。

「別に円堂君たちのせいじゃない。あれぐらいのディフェンスを破れないなんて、僕もまだまだだね……」

ちよつと情けないな。僕は珍しく自己嫌悪している。

「アフロディ……」

静かにこちらに向かってくる少年に、いち早く気づいたのは円堂君だった。

「吹雪……?」

吹雪君は僕の前に立った。

見詰める視線から、たくさんの言葉を溜めているのが分かる。

「すごいね、君」

だが、彼は一言だけいうと、きびすを返し去っていった。

いつも、どんなときも苦しい顔でベンチに座っていた吹雪君。一度も笑顔を見たことがなかった。

でも今の一言で僕も救われたような気がする。

吹雪君。僕は雷門の力になれたんだろうか。
少なくとも君の力にはなれただろうか…。

「分かってくれたんだ…」

僕は去っていく吹雪君のうしろ姿に呟いた。

「ああ、ありがとう、アフロディ」

円堂君のその言葉から精一杯の誠意が伝わってくる。
わかっているよ。僕の方こそありがとう。君たちと共に戦えて嬉しかったよ。

円堂君は「今日は大変な日だったな。ゆっくり休めよ」と言い残して帰って言った。

一週間前

一週間前のこと。

雷門イレブンの強さは力だけではなかった。何度倒されても立ち上がる不屈の精神。仲間を信じる強い絆。の前に立った。

唐突に現れた僕の姿に恐れ慄くイレブンたち。

でも、「君たちと共に奴らを倒す！」

そう宣言した僕を円堂君は受け入れてくれたのだった。

かつては敵として戦ったライバル。

無敗の世宇子から勝利をもぎ取り、僕を悪夢から目覚めさせてくれた。

影山に操られ、神のアクアの魔力に取り憑かれていた僕は、彼らのお陰で正気に返ることができた。

雷門イレブンの強さは力ではなかった。

何度倒されても立ち上がる不屈の精神。仲間を信じる強い絆。

試合の最中においてもレベルアップして行く円堂君の姿は衝撃的ですらあった。

僕は、そんな彼らと共に戦ってみたい。

エイリア学園との戦いを見るにつけ、湧き上がる闘志を抑えきれなくなっていたのだった。

あれから一週間が経とうとしている。

瞳子監督によりイナズマキャババンへの参加を許可された僕は、彼らと共に練習に明け暮れた。

そして、今日。現れたのはダイヤモンドダストとプロミネンスの融合チーム、カオスだった。

戦いを挑んできたカオスは、ダイヤモンドダストよりもはるかにパワーアップしていた。

激しいスライディングの嵐をかわせる者は誰もいない。

フォワードで最前線に上がっていた僕は、フローズンステイルとイグナイトステイルの猛攻を受け試合途中に意識を失ってしまったらしい。

そして、この病院に運ばれた。

僕なりにやれるだけのことはやったつもりだ。雷門へ来たことを
悔いてはいない。

でも…。

片想い

ベッドに横になったまま窓に目をやると、もう外は暗くなっていた。夜の闇が僕をあの日の夜へ引き戻す。今夜は眠れそうにない。

今日までずっと、稲妻町に来てからも片時も頭を離れないことがある。

碧衣。

何も言わずに来てしまった。大事なことも、何一つ。最後のあの夜、あんなことをしてしまったのは間違いだった。

碧衣のことを考えると、息をするのさえ苦しくなる。

抱きしめた碧衣のぬくもりが今もまだ甦えってくる。本当は、あのまま碧衣の全てを奪い去ってしまいたかった。堪らなく欲しくなった。

もしもあの瞬間、碧衣が僕の気持ちに気づき受け入れてくれたとしたら、本当にそうしてしまっていたかもしれない。

でも碧衣は小さく僕の名を呼んだだけで、腕の中で怯える仔猫のようにじっとしていた。

無理やり僕のものにするなんて、出来るわけない…。

あのときのことを思い出すと、胸が張り裂けそうになる。

きっと今頃軽蔑されてるだろうな。何もしなかったとは言え、あんなことをした僕は最低だ…。
なのに、碧衣に謝ることすらできない。

…碧衣…。

………会いたい…。

君の笑顔が見たい。

今君は何をしているんだろう。

ダメだな、僕は。

もう最後のつもりだったのに。

あのまま碧衣の前から去ると決めたはずだった。それなのに、今またこうして碧衣のことばかり考えてしまう自分がいる。

こんなに好きなのに、言葉で思いを伝えられなかった。

伝えていたら、何かが変わっていただろうか。良い方に？それとも、悪い方に…。

悲しいけど、脈、なさそうだったな。碧衣にとって僕はただの友だちだ。分かっていた。最初からずっとそうだったことも。近づきすぎ…だったのかな。

考えても仕方がない。もう、全て済んでしまったこと。ここへ来たときに決めたことだ。

僕が進むべき道はたった一つだけ。前に続く道。これから先のことを考えなくてはならない。

碧衣、さようなら。片想いで終わってしまったけど、本当に君のことが好きだったよ。

電話

結局、照美には会えなかった。何度も電話をかけてみたけれど、繋がらなかった。

時計を見ると、もう七時半になろうとしている。これ以上ここにいても埒が明かない。

バカだな、私…。

胸いっぱいの後悔と不安を溜め込んだまま、私は重い足を引きずるように家に向かって歩き出した。

やっとのことで家に帰り着いたときは九時半になろうとしていた。

玄関を開けると、血相を変えた母が飛び出してきた。

「碧衣！どこに言ってたのよ？中学生が帰ってくる時間じゃないわよ？」

「お母さん…ごめんなさい、今日は夕飯の支度できなかった」

「そんなことはいいわよ、それよりどうしたのよ、こんな時間まで帰らないなんて碧衣らしくないじゃない」

私は正直に母に話した。

「友達が一週間も学校を休んでいて…心配になって尋ねていったの。うちと反対方向の家だからすごく遠くて、しかも初めて行く家だったから迷っちゃって…。ごめん、もう疲れたから私寝るわ」

本当に疲れていた。身体もそうだが、心もつかれきっていた。今すぐベッドに倒れたい。

寝室へ向かう私の背中に、母が声を投げた。

「さっき、久しぶりにお姉ちゃんから電話があったわよ。碧衣、元気にしてる？って言ってたわ」

お姉ちゃん？　そういえば…。

なんで今まで気がつかなかったんだろう。すっかり忘れていた。確か、お姉ちゃんの住む街に大きな川が流れていた。そして、高い丘の上の公園に聳え立つ鉄塔…。

私の見た夢。あれはもしかしてあの場所…？

慌てて部屋へ行くと、電話の子機から姉にかけた。

「ああ、碧衣？　元気にしてる？　こっちは順調よ。ねえ、今度遊びに来ない？　稲妻町は面白いところよ」

稲妻町！そうだ、そんな名前だった。

「ねえ、確かそっちに川原と丘の上の高い鉄塔が見える場所、あるよね？」

「なあに？いきなり。あるけど？大きな川が流れていて。でも、それがどうかしたの？」

やっぱり！

「行く。遊びに。今すぐいく」

もしかしたら姉の住んでいる稲妻町に照美がいるのかもしれない。

「ええ？来ない？って言うておいてなんだけど、もう九時過ぎよ？明日は土曜日なんだから明日にすればいいじゃない」

「分かった。じゃ明日行くわ。」

「何をそんなに慌ててるの？お母さんは知ってるの？」

「これから話す。じゃ、明日ね」

強引に電話を切って、改めて考えた。姉の住む街に、私の見た夢の場所があることは事実だった。

それがどういふことなのか、まだわからない。単に、姉のアパートに行ったときに見た風景が夢に出てきただけかもしれないし。

だからそこに照美がいるとは限らない。仮にいたとしても、どうやって探せばいいのかもわからない。

分かっている。けど…。

私はその場所に一縷の望みをかけるしかなかった。

もしも照美に会えたら、どんな顔をすればいいんだろう。こんな風に思うようになってから、まだ照美の顔を見ていない。

あの最後の夜、私はどんな顔をしていた？

抱きしめられたことに戸惑って…。

だけど、気づいてしまった。自分の気持ちに。

とても照美を好きなのだ。

なのに、あれから一度も会えていない。

照美はいつもそばにいたのに、会いたときにはもういなかった。

明日…もしも本当に会うことができたら、必ず自分の思いを伝えよう。

病院（前書き）

照美視点です。

病院

翌日の朝。

院内のスピーカーから流れてくるさわやかな音楽に揺り起こされた。

アナウンスが起床時間を告げる。

『おはようございます。6時です…』

いつの間にか、僕は深い眠りに落ちていたようだ。眠れないかと思っただが、昨日の昼間の疲れはやはり身体を疲弊させていたのだろう。

僕は痛む上半身をかばいながら起き上がった。

「まだ痛いな…。昨日の今日じゃ仕方ないけど」

誰にともなく独り言。

トイレに行ったり顔を洗ったりしていると、看護師さんがやってきた。手には点滴のバッグと湿布薬を持っている。

「おはようございます。痛みはどうですか？良く眠れました？」

そういいながら部屋のカーテンを開けてくれた。眩しい朝の光が目飛び込んでくる。

「まだ痛みはありますが、以外と熟睡しました」

僕は笑顔で答えた。

「ちょっと湿布を取り替えますね」

ベッドに座ると、看護師さんが丁寧にパジャマの上着を脱がせてくれた。

バストバンドを外すと素早い手つきで湿布を交換し、また元のようにつける。

パジャマの着替えを手伝ってくれたあと、「ちょっとチクツとしますよ?」と言って僕の腕に点滴の注射針を刺した。

「亜風炉くんは、まだ中学生だから安静にしていれば比較的早く回復すると思うわ。明日には退院できますから、あとは通院と自宅療養ね。完治するまで激しい運動はしちゃだめよ」

「そうですか…」

何だかため息が出る。

「大丈夫、スポーツをしている子にはたまにあることよ。亜風炉君だけじゃないから。何かあったらナースコールしてくださいね」

そういう残して、看護師さんは忙しそうに出て行った。

僕はゆっくりとベッドに横になる。左腕から伸びる透明な管を見詰めた。

サッカーで怪我なんて、初めてだな…。

僕は自嘲気味に笑った。

すっかり目が覚めて、もう眠くはならなかった。

稲妻町の姉（前書き）

碧衣視点に戻ります。

稲妻町の姉

昨晚、慌てて準備をした私は早朝の電車に乗って稲妻町へ急いだ。出迎えてくれた姉は私がいまにも早く来たので驚いていた。

「びっくりしたわ、こんなに早く来るなんて。時間を言ってくれたら駅まで迎えにいったのに」

姉は、私の荷物を持ちながら部屋へ入るように促した。

「お姉ちゃん、元気そうね。大学生活はどう？」

「自由気ままでお気楽な学生……って思ってるでしょ？ 実際はそうでもないのよ。結構忙しいんだから」

姉の入れてくれたコーヒーを飲みながら、やっと一息ついた。

この街に照美はいる。今朝の夢で私は確信した。

病院の屋上。見上げると『稲妻総合病院』と描かれた大きな看板がある。すぐに分かった。これは昨夜の夢の続きなのだ。

人の気配がする。サッカーのユニフォームらしき姿の男子。私と同じくらいの子だろうか。褐色の頭髮にオレンジのバンダナを巻い

ていた。

彼はもちろん照美ではない。でもその男子は照美に関係があるのだ。

だから照美はここにいる。
今の私にはそう信じられる。

「碧衣、朝ごはん食べたら街を案内してあげるわ」

姉は料理が得意だ。高校卒業で私にバトンタッチするまで、夕飯は姉の担当だったのだから。

「お姉ちゃんのお料理、久しぶり」

「料理って言っても朝食だから豪華なものじゃないけどね」

「でもうれしい。誰かが作ってくれたものを食べるのって、とてもありがたいと思う。さっき入れてくれたコーヒーも美味しかったよ」

「ありがと。碧衣も大人になったわね。毎晩夕飯を作るのは大変でしょう」

「だいぶ慣れたよ。ところでお姉ちゃん、私行きたいところがあるの」

「いいわよ、連れて行ってあげるわ」

二時間後。

私は目的の場所にいた。

稲妻総合病院。

そこは、姉のアパートから歩いて行けるほどの距離だった。

やっぱり本当にあったんだ…。

ナースステーションで入院患者の面会だと告げると、名簿に名前を書くように言われ、病室を教えてもらえた。

本当に照美がここにいる。こんなにあっさりとしたどり着けるなんて、何だか信じられない。

まるで、何かに導かれているようだった。

振り返れば、夢だけを頼りにここまで来るなんて、そうとう無茶な行動だったと思う。正気の沙汰ではないかも知れない。

でも、もしもう一度照美に会えなかったら、二度と会えなくなるような気がしたのだ。

照美はもう学校には戻ってこない。

それが、あの家の閉ざされた門を後にしたときによぎった私の思いだった。

「病院に来たかったの？」と不思議そうな顔をしている姉。

「近くだし、一人で帰れるからお姉ちゃんは戻っていていいよ」

と言って、先に帰ってもらった。

再会

整形外科病棟。

『5023 | 亜風炉照美様』

個室のようだ。

思いのほか緊張する。動悸が激しくなる。

こんな状態でちゃんと話せるかしら…。

思い切ってノックをした。

「はい」

それは懐かしい響きの照美の声だった。

その声を聴いた瞬間、私の心臓は飛び出しそうなほどに大きく打った。胸が詰まり目頭が熱くなる。

クリーム色の引き戸を開けると、白いカーテンの向こう、窓際のベッドで半身を起こしている照美の姿があった。

「碧衣!？」

「照美!」

私は持っていたバッグが落ちたことにも気付かないでいた。

「碧衣？ どうして……ここに？……」

照美は驚きのあまり、目を瞬いて私を見ている。

一瞬、いるはずのないものを見てしまったときのような戸惑いの色。

続いて現れたのは、包み込むような優しい笑顔だった。

泣きたくなるほどに切なく。

眩暈がしそうなほどに甘美な。

ずっとずっと永く待ちわびていたこの瞬間。

外は風がやみ、音は振動をなくし、光さえも色を失ったように。

今ここで、世界の全ては私たちだけのために存在した。

「照美…やっと…会えた」

照美のそばへ駆け寄ると、胸にあふれる思いをやっとのことで言葉にした。

「碧衣……」

「良かった……良かったよ……いたんだね。本当に……いたんだ……良かった……」

私は何度も同じ言葉を繰り返していた。そして、とめどなくあふれる涙を両手で覆い、ただ立ち尽くしていた。

「碧衣？泣いているの？」

「どうしたんだろ……泣くつもりなんかなかったのに……照美の顔見たら……涙、止まなくなっちゃったよお……」

私の声は、どうしようもないくらいに泣き声だった。

「碧衣……」

突然、照美が私の腕をつかんだ。

「え?……」

次の瞬間、私は照美の懷に強く引き寄せられ、びっくりするくらい顔が間近に迫って……そして目を閉じたその唇が私の唇に重なった。

……え?……

私は、息が止まりそうなくらいに驚いて、思い切り目を見開いたままだった。

唇から伝わる。

注ぎ込まれるように。

情熱と、渴望……。

私の身体が火照り始める。

ああ、そうか……。

照美は、今も…私を望んでくれている……。

私は静かに瞳を閉じ、照美を受け入れた。

もう二度と離れない……。

今日までの二人の永い空白を埋めるかのように、甘く、優しく、永遠と思えるほどに深く……。

照美が私の腕をつかんだまま離さないで、そのままベッドに倒

れこんでしまった。

それでもまだ、唇は渴いた癒しを求めるように、溶け合ってしまった。
いそうなほどに永く求め合った。

唇から

「大好きだよ…」

唇を離した二人の声が重なった。

たった今ここで唇が触れ合ったその瞬間に、私達は何もかもを理解し合った。

もう、二人の間にはどんな隔たりもない。

後悔も、戸惑いも、一度は諦めかけた気持ちでさえ、全ては遠い過去の出来事でしかなかった。

色を失っていた景色が、再び明るい色彩を取り戻す。今二人の間にあるのは、強く求め合う気持ち、ただそれだけだった。

見詰め合う。

照美の目が笑っている。

「びっくりさせた？でも、泣いている碧衣のこと見てたら堪らなく、そうしたくなった」

「ずっと、会いたかったよ。最後のあの日からずっと…」

「碧衣、もう泣かないで？ごめん。ずっと言えないままで。君のこ

とがとても好きだって……」

「照美：ありがとう。もういいの。あやまるのは私。ずっと気づいてあげられなかったんだから。私、こんなだから……ほんと、あきれるよね。もう、遅いかもって思った」

最後のほうは泣き笑いだった。

「うん。あきれる。でも僕はそういう碧衣を好きになっちゃたんだから、仕方ないよね」

「もう！照美のイジワルッ」

照美は楽しそうにクスクス笑っている。

私は、改めて照美の顔をまじまじと見詰めた。

「どうしたの？」

「照美って：すごい綺麗な顔してるよね」

「え？」

「だって、こんな風に好きだと思うようになってから照美の顔みるの、初めてなんだもん。今までは別に意識してなかったから何となく見てただけだし：整った顔立ちで綺麗だなあとは前から思っ

たけど」

「何となく、だったんだ」

「そう、今までではなんとなく。だって、友だちだと思ってたから……」

「僕は見ていたけどね、碧衣のことずっと」

「そう……だったんだよね。私、気づくの遅すぎだよね？きつと照美はもういい加減に愛想つかしてるんじゃないかって、正直思った」

「碧衣……僕の方こそあの夜、突然あんなことしたりして軽蔑されたんじゃないかって後悔してた。でも、今日ここへ来てくれて、そうじゃなかった……うわっ……んっ……」

私は素早くベッドに膝を付いて乗りあがると、照美のあごに手をかけ、今度は私のほうから唇を塞いだ。

「！」

軽蔑なんて、してないよ。もう、ずっと離さないから！

いつまでもこうしていたい、何度でも……。

理由

「碧衣……びっくりした！でも……女の子に唇を奪われるなんてドキドキしたよ」

照美は心の底から幸せそうに微笑んだ。

「ねえねえ、もっとして？」

甘えたように、満面の笑みを向けてくる。

「やだよー！もうしない！だって、そんなこと言われたら恥ずかしいもんっ」

私は狭いベッドから降りると、来客用のスツールに座りなおした。

「あのね、私、照美に会ったら言いたいことや確かめたいことがたくさんあったの。でも、もういい。こうして会えたし、ちゃんと自分の気持ちを伝えられたから」

「碧衣……でも、どうしてここがわかったの？誰にも教えていなかったのに……」

照美は心底不思議だ、という顔をしていた。

「そういう照美こそ……どうしてここにいるの？それにその身体、大丈夫なの？……怪我、してるの？」

さっきから無我夢中で……ここが病院で、しかも照美は入院してるとんだけことを忘れていた。

整形外科というからには、病気ではないのだろう。でも、見たところ外傷はなさそうだった。

「うん、ちょっとね。カッコ悪いな」

「どこか、痛むの？」

「大丈夫だよ、さっき痛み止め打ったから」

そして、照美はここ一週間の間、自分の身に起こったことを話してくれた。

エイリア学園の侵略について。
フットボール・フロンティア準決勝で争った雷門中の危機。

その雷門中の助っ人に入った経緯。

「何も言わずに世宇子を去ったことは謝るよ。ごめんね。でも碧衣の家と一緒に夕食を食べたあの日、本当は話そうかと思ったんだ。これが最後かもしれないと思って。でも…結局何も話せなかった」

「最後って…」

最後って、何？

「ごめん。心配かけちゃったね」

「心配するよ。急に一週間も来なくなるなんて…探したよ。先生に住所を教えてもらって、照美の家まで行ったんだよ。でも誰もいなくて…そしたら、もう二度と会えないんじゃないかって気がしてきて…」

「碧衣、家まで来てくれたんだ」

「そうだよ、すごい遠かったよ、照美の家。全然同じ方向じゃないし」

照美はちよつと決まり悪そうに、照れくさそうな顔で笑った。

「僕はきちんと碧衣に謝らなくちゃならないことがある。あの夜の

こと。ずっと気にかかっていた。あんなことをして、黙って碧衣の前から姿を消すなんて…」

「照美…」

「碧衣の気持ちを考えていなかったよね。僕は自分のことしか考えてなくて…卑怯だったね。ごめん…」

「もういいの、ホントにもういいの。あの日のことがなかったら、本当に私何も気づかないままだった」

あの時は戸惑った。切なくて、胸が苦しかった。

照美を好きになってしまったから。どうしようもないくらいに。

あんな気持ちは初めてだった。

気持ち（前書き）

照美視点です。短かくてすみません。

気持ち

碧衣が僕を探して遠い街まで来てくれた。

僕のために涙を流してくれた。

好きだと言ってくれた。

キスをしてくれた。

そう思うと僕は堪らなく碧衣が愛おしくなり……それは、今まで碧衣に抱いていた恋心とは少し異なる感情に思えた。

誰よりも大切な人…。

僕は碧衣を愛している。

さようならも言えずに、姿を消してしまっただけで、今こうして碧衣と再びめぐり合えたこと、それは何よりも光り輝く奇跡のように思えた。

最後。

本当にそう思っていた。

黙って一人で行くつもりだったけれど、今の僕にそれができるの
だろうか。

碧衣……………。

僕は今更迷っているのか。もう決めたことなのに……………。

賑やかな訪問者

ガラガラッ。

突然勢い良くドアが開いた。

「アフロディ、具合はどうだ？」

良く通る大きな声。褐色の頭髮にオレンジのバンダナ。私の夢に出てきた男子に間違いない。

「円堂君、ノックくらいしなさいよ！」

そう言いながら後からもう一人、ウェーブがかった髪の長い綺麗な女の子が入ってきた。

「ああ、円堂君。僕なら大丈夫だよ。夏未さん、気にしないでいいよ。それより、吹雪君はどう？」

夏未と呼ばれた女の子は、私の姿を捉えると小さく会釈をして微笑んだ。私もお辞儀を返す。

「ああ、吹雪ならもう大丈夫。アフロデイのお陰だよ。ありがとう！みんなアフロデイには感謝してるんだ」

「そう、良かった」

「みんなで見舞いに行こうって言ったんだけど、病院に大勢で押しかけたら悪いって監督が言うから俺たちが代表で来たんだ」

「そうなんだ。来てくれてありがとう、夏未さんも」

「アフロデイ、早く元気になって、また一緒にサッカーしようぜ！」

円堂君と呼ばれた快活そうなバンダナ男子は、ニツと白い歯を見せて笑った。

「なあアフロデイ！今度フットボールフロンティア・インターナショナルがあるだろ？俺さ……あ、おい夏未、何するんだよ？」

「円堂君、いいからもう帰るわよ？じゃあね、アフロデイ、早く元気になってね」

夏未さんは、私に向かって「お邪魔しちゃってごめんなさいね」と言うと、円堂君の腕を引いて出て行こうとした。

「おい、何だよ、どうしたんだよ。来たばかりじゃないか、もう帰るのか？俺はアフロデイに大事な話があるんだよ」

「いいから帰るのよ！相変わらず鈍い人ねえ。話なら後でいくらでもできるでしょ？」

夏末さんのあきれたような顔。どうやら私に気を使ってくれているようだ。

「今話したいことなんだよ」

「……じゃあ手短かにね」

円堂くんは、神妙な顔で話し始めた。

「アフロディ。俺達、明日から富士山へ行くんだ。そこに行けば、エイリア学園の何かがつかめるかもしれない。今度こそ、必ずやつらを倒して帰ってくる。だから……帰ってきたらまたお前とサッカーがしたい」

「円堂くん……」

「アフロディと豪炎寺ってすっげーいいコンビだと思うぜ？俺、お前と一緒に世界の舞台を目指したいんだよ！絶対、一緒に日本代表になろうぜ！」

「円堂くん……。そうか、ありがとう。気をつけてね……」

お食事

二人がいなくなった病室に、元の静寂が訪れる。

「彼は雷門中のキャプテンの円堂君、女の子はマネージャーの夏未さんだよ」

「そうなんだ。なんか、威勢のいい子だね。キャプテン！って感じ」

「でしょ？ていうか、僕も世宇子ではキャプテンだったけど？」とくすくす笑った。

「照美。さっき最後っていったけど、もう世宇子には戻らないの？円堂くん言ってた。また一緒にサッカーしたいって。照美は雷門中に転校するつもり？」

照美は、私の質問に答えず黙り込んでしまった。

「……………何？どうしたの？」

「うん…………雷門中に転校するわけじゃないよ」

「じゃあ、何？言って？私驚かないから」

「…………退院してから話すよ」

照美は相変わらず思案顔だった。

「……そう。照美がそうしたいならそれでいいよ」

これ以上追求しても、きっと話してはくれないだろう。私は照美が自分から話したくなるまで待つことにした。

そのとき、病室のドアがノックされた。

「お食事です」

昼食が運ばれてきたのだった。

「わあ、おいしそ！病院の食事っておかゆとかそういうのかと思っただけど違うんだね」

「うん、僕は病人じゃないからね」

「碧衣も食べる？」

「え？いいよ、下にカフェがあったからそこで何か食べてくる」

「そう？じゃ、いただきます」

私は照美が食べる様子をじっと見ていた。

「何？見られてると食べにくいんだけど？」

「いいじゃん、気にしないで食べて？」

「そんなにじろじろ見られてたら恥ずかしくて食べられないよ」

「だって見ていたいんだもん、照美が食べてるところ」

「変な碧衣だなあ」

ホント、変なの。でも見ていたい。

照美はもぐもぐと咀嚼している。何気ない仕草だけど、今はそれさえも愛おしく思える。

私はそうしてしばらく食事をする照美を見ていた。

「じゃ、私も下で食べてくるね」

私は病室を後にした。

途中ですれ違った見知らぬ男が照美の病室へ入っていったような気がしたが、気のせいかと思っていたいして気にも止めなかった。

もう1人の訪問者

碧衣が出て行くと、すぐにまたドアが開いた。戻ってきたのかと思っただが、そうではなかった。

入ってきたのは、紺のスーツを着込んだ男だった。

「何度か代理人を通して話していますが、じかに会うのは初めてですね。アフロディこと、亜風炉照美くん」

男は丁寧に頭を下げる。

「チェ・チャンスウか…。じきじきにお出ましとは驚いたよ……」

会うのは初めてだった。中学生がスーツとはおかしな格好だと思っただが、彼はそれが不思議と似合う落ち着きのある男だった。

「当然です。スカウトですからね。お目にかからなくては失礼だ。今出て行った女性、彼女ですか？ かわいい人ですね？」

エラの張った輪郭と、細い一重の目。彼は笑っているのか普通の表情なのか、あまり区別が出来ない顔をしていた。

「君には関係ないだろう？」

「わかりやすいですね。まあいいですよ、それよりどうですか？まさか気が変わったりしていませんか？」

「……………」

気が変わったわけではないが、こうして突然尋ねてこられて戸惑っているのが正直な気持ちだった。

「まさか迷っているのですか？日本代表への未練ですか？」

「……………」

日本代表への未練なのだろうか……。それとも碧衣に言えずにいる自分の未練がましきなのか。さっきの円堂くんの笑顔と、碧衣の笑顔が重なる。

「どうしました？」

「いや。なんでもない。もう決めたことだ。安心していいよ。気持ちにはかわらない」

僕は脳裏に浮かんだ思いを振り切るように断言した。

「それは良かった。あと、あの約束も忘れないでくださいね」

「分かっている」

「良かった。あなたは理解の速い人だ。あなたと共に戦えると思うと、世界の舞台が楽しみになってきましたよ。では失礼しますよ」

そういうと、チェは名刺と花束を置いて帰っていった。男から花を貰っても嬉しくはないが、僕の視線は彼の置いていった花束から離れなかった。

未熟さと苛立ち

せっかく碧衣と気持ちが通じ合うようになったのに……。
円堂くんが、僕と一緒に世界の舞台を目指したいと言ってくれたのに……。

それなのに、僕は二人の気持ちにこたえられない選択をしてしまった。

韓国か……。

そこに僕を待ち受けている新しいフィールドがある。
僕はしばらく横になって天井を見詰めていた。

気がつくのと、開けた放ったままの窓から夕方の涼しい風が吹き込んでいた。どうやら少し眠ったようだ。

そのとき、カフェに行っていた碧衣が戻ってきた。

「照美、ただいま」

「おかえり。ずいぶん遅かったね」

何事もなかったフリをして迎えた。

僕の動揺が彼女に悟られないだろうか…。

食事はすっかり片付けられ、テーブルには花束と冷めたお茶だけが乗っていた。

「ねえ、碧衣。碧衣はどこか行きたいところある？」

僕は少し曇り空になってきた窓の外を見詰めながら訊いた。

「え？行きたいところ？急に言われてもなあ。どこか連れて行ってくれるの？例えば？」

最初で最後かもしれないけれど、碧衣をどこかに連れて行ってあげたい。

「いいよ、どこでも。言ってみて」

「じゃあね、ギリシャ！」

「ギリシャ？何で？」

突拍子もない答えに思わず僕は目を剥く。

「だって、私達ゼウス（世宇子）でしょ？一度行ってみたいなんて思ってたんだ」

「ゼウスか…。確かにギリシャだね」

「でも行けないよね、私たち、まだ中学生だし」

碧衣は冗談にしては、妙に穏やかな顔で微笑んでいた。僕は笑って返す。

「そうだね。ギリシャはちょっと遠いね。二人じゃ行けないよ?」

「…じゃあ、いつか…大人になったら連れて行って?」

碧衣の瞳が揺れているように見えたのは気のせいだろうか。

「いいよ。いつか大人になったら行こう」

「じゃあ、約束ね」

余計に寂しさが募る。

果たせそうもない約束。

中学生のときにした約束なんて、碧衣はいつか思い出の中にしまい込んで忘れてしまうのだろうか。けれど。

中学生って、中途半端だな。

一人前に人を好きになったり、好きな人のために何かをしたいと思ったりするのに、実際は何もできやしない。

碧衣のことが好きでも、僕はただ好きでいることしか出来なくて、それ以上のことをどうしてあげたらいいのかわからない。

韓国へ行くことでさえ、彼女に話せずにいるのだ。

まだ大人にはなりきれていない未熟さが、僕を苛立たせる。自分の力ではどうすることもできないことが、世の中にはたくさんあるんだ…。

カフェで出会った人（前書き）

◆ ◆ ◆ の後から主人公視点にもどります。区切りが悪くてすみません。

カフェで出会った人

「あ、お花！活けてあげるね」

碧衣は、誰が持ってきたのかとも問わずに花束を抱えると、花瓶があるかな？と言いながら出て行ってしまった。

花瓶を抱えた碧衣が戻ってくると、曇り空は一気に暗くなった。雨が降り始めたかと思うと急に勢いを増し、碧衣が慌てて窓を閉めてくれた。

「うわぁ、スゴイ雨だね…。いきなり土砂降りだよ」

空は低く暗雲が立ち込め、雷雨になった。



夕食の時間も終わり、面会時間終了を告げる院内アナウンスが流れる。

「もう面会時間も終わりだよ？」

「いいの、今日は帰らないから」

私はちょっと駄々を捏ねるように言ってみた。

「ダメだよ、看護師さんに見つかったら怒られるよ？」

困ったような照美の顔。

「いいよ、だって帰っちゃったら…また照美がいなくなっちゃうかもしれないでしょ」

「大丈夫だよ、僕は入院してるんだし、いなくなったりしないよ」

「でも、一緒にいたい。いいでしょ？」

「…しょうがないなあ。でも、見回りが来たら帰されるかもよ？」

「トイレに隠れるもん」

照美は、私に隠している。どうして言ってくれないんだろう。私は何を聞いても驚かないと言ったのに。

私がカフェに行くときにすれ違ったあの人は、やっぱり照美への来客だった。

チェ・チャンスウと名乗った韓国人。とても物腰の柔らかい人で、同じ中学生とは思えないほど大人に見えた。

カフェで食事をしていると、私のテーブルの傍へやってきた彼。

「ここ、よろしいですか？」

他にも席は空いているのに、どうしてわざわざ？……と怪訝に思っている、彼は名刺を差し出してこういった。

「はじめまして。僕は韓国からアフロディに会いに来たチェ・チャンスウと申します」

チェ・チャンスウ

私は突然あらわれた韓国人を前に、持っていた箸を取り落としてしまったのだった。

「突然驚かせてすみません。あなたはアフロデイの親しい方とお見受けしましたが？」

「……韓国の方……ですか？照美に会いに？」

「はい。アフロデイには韓国の代表入りをお願いするために、以前から代理人が接触してきました。でも今日は僕が直接彼のことを確認するために、ご挨拶も兼ねて来日した次第です」

チェは流暢な日本語を喋り、殷勤な言葉遣いをする人だった。

「どうして韓国のスカウトが照美に……？」

「やはり、彼はあなたにも話していないようですね。ならば僕から詳しい事情を申し上げるのもなんですが……」

そういいながらチェは続けた。

「今度フットボールフロンティア・インターナショナルがあるのは

「ご存知ですよね？」

「……はい。知っています」

チェの丁寧な言葉遣いに、私も釣られて丁寧になる。

「そこで私達韓国代表は、日本の代表選考会が始まる前にアフロデ
イに韓国へ来ていただきたいと思っていますのです。このことは彼も
一度は承諾してくれました。でも今しがた会った様子では迷ってい
るように見えました……」

「……………」

私ははじめて聞く話に、なんと答えたらよいのかわからない。

「私は、原因はあなたにあるのではないかと思っています。どうで
すか？」

「照美が……韓国代表に……」

確かに、照美は何か私の知らないことを抱えている様子だった。
最後、と言ったあの言葉。

あれはこのことを指していたのか……。

「もしもアフロディが迷っている原因があなたなら、あなたも一緒に韓国に来ていただませんか？いろいろな心配ごとはあるでしょう。でも、少し考えてみてください」

チェは、とんでもないことを恐ろしく真面目な顔で言うのだった。

「そんな……急にそんなことを言われても、今この場でお返事することは出来ません」

当然だ。照美はまだ私に何も話してくれていないし、韓国へ行くなんてことは私一人で決められることではない。

「分かりますよ、当然そうでしょうね。お返事は今でなくて結構です。ただ、あなたにそのつもりがあるのなら、こちらは誠意をもってお迎えする準備があるということをおわかっていただきたいと思います」

「……………」

「ではご連絡をお待ちしています。またお会いしましょう」

そういうと、チェは席を立った。

消灯時間

「碧衣？」

私は照美の声で我に帰った。

「ああ、ごめん、照美。何か言った？」

「どうしたの？さっきからぼーっとして」

「うん、なんでもない。で、何だっけ？」

「消灯時間だよ？」

「え？もう？」

言われてみると、消灯時間を告げる音楽とアナウンスが流れていた。

「ほら、急がないと看護師さんが来るよ」

急に現実に戻される、今日は帰らないと言ったことを思い出す。

コツコツという足音が近づいてきた。

「あ、来たよ！隠れて！」

私は慌ててトイレに駆け込んだ。

「もう消灯時間ですよ？面会のお客さんはお帰りになりました？」
という看護師さんの声。

「あ、はい。さっき帰りました」

平静を装った照美の声が聞こえる。

「これ、今日の最後の分ね」

続いて、何やらガサガサという音。

「じゃあ、おやすみなさい」と言って出て行くドアの音がした。

「碧衣、出てきて大丈夫だよ」

出ると、緊張が解けた顔の照美。見ると点滴スタンドに満タンに入った新しいバッグが吊るされている。

「また点滴？痛むの？」

「少し、ね。これは痛み止めだから」

なんだか弱っている照美を守ってあげたくなる。

照美は退院したら話すと言っていた。それは多分、韓国行きのことなのだろう。私は、照美が自分から言えずにいることに苦しんでいるのではないかと思い始めていた。

静けさの中、枕もとのスタンドの小さな灯りがそこだけを浮き上がらせる。照美は横にならずにベッドに座っていた。

私は照美の手にそっと触れてみる。

「今夜はずっと傍にいるからね」

「あはは、僕、一晩中見張られてるの？」

ちよつと照れたように笑う。私は真剣に返した。

「そう、ずっと朝まで見張ってるからね」

照美は相変わらずにこやかに微笑んでいる。

「緊張して眠れないよ」

「じゃあ、眠らないで…」

「碧衣…」

私たちはどちらからともなく、自然に唇を合わせた。照美の柔らかい唇が私の首筋に降りてくる。切ないため息が漏れた。

「照美、大好きだよ……」

「碧衣…愛してる」

行きたいところ

消灯時間が過ぎた病棟は、静まり返って物音一つしない。

私達は、今までのお互いのことを話したりした。

照美がいなくなつてからの日々。どうして照美の居場所が分かったのかということ。姉が稲妻町に住んでいること。ここには、その姉に連れてきてもらったこと。

照美も今までのことを詳しく話してくれた。

それは私の知らないことばかりで、いろいろ大変だったんだってわかった。

学校を休み始めてから、本当にいろんなことがあったんだね。

それから、私を好きになった日のことも話してくれた。理紗に気づかれていることも、ちゃんと知っていた。実は、理紗に告んなさいよ！とハッパをかけられたこともあったなんて。

全然知らなかったな。

私の知らない照美を全部教えて欲しい。

一晩中話していても、きつと話し足りないくらい…。

☆

★

☆

今なら言えそうな気がする。

僕は、これ以上碧衣に黙っているのが辛くなってきた。

すると、碧衣が僕の目を見詰めてゆっくりと言った。

「私、行きたいところ、あるんだ」

「ギリシャでしょ？」

すると彼女はイタズラっぽく微笑んで

「韓国」

「!.....え?.....」

「近いでしょ? 一緒に連れて行って?」

.....なんだろう、急に心臓が速くなる。

「.....どうして.....それを...」

「照美、最後なんて言っで。また私を置いていこうとしてたでしょ? そうは行かないよ」

「なんで...」

「知ってるのかって?」

碧衣は勿体ぶるように、小さく微笑んだ。

「あの人がカフェに来たの。いきなり私の向かいに座ったからビックリしたけど、とても丁寧な人で韓国から代表のスカウトに来たって言ってた」

「チェ・チャンスウに会ったのか」

「うん。これ」

そういつて碧衣はチェの名刺を見せた。

それは、さっき彼が僕のテーブルの上に置いていった名刺と同じものだった。

碧衣が知っていた…。

僕が韓国へ行くということを…。

そして、一緒に連れて行って欲しいと言っている。

碧衣と一緒に韓国へ……？

考えもしなかった。

韓国

「碧衣、本気で言ってるの?」

僕は碧衣の真意を知りたい。

「本気だよ」

そんな簡単に……。

「チェは碧衣に何て言ったの?」

すると碧衣はふふっと笑った。

「照美についてきてくれませんかって言われた」

あの男、澄ました顔してそんな事言ったのか…。

「他には?」

「僕は、アフロディを韓国代表選手としてスカウトに来たチェ・チ

ヤンスウと申します。もしあなたさえ良ければ、彼と一緒に韓国へ来ることは出来ませんか？あなたにそのつもりがあるなら誠意を持って迎えします……とかなんとか」

碧衣はチェ・チャンスウの口調を真似てそう言った。

涼しそうな顔で淡々と喋るチェ・チャンスウの顔が思い浮かぶ。

「……それで、碧衣は受けたの？」

「返事はまだしてないよ。さすがにはいそうですか、って行けるところじゃないしね。でも照美がいいと言ってくれるなら行きたい」

「韓国だよ？国内じゃないんだよ？学校とかはどうするの？僕はいつ日本に戻るかわからないよ？…」

「分かってるよ」

「碧衣……全然分かってないよ、君は…」

「照美がね、黙ってるの辛そうに見えた。不思議だね、今までは気づかなかったようなことも、手に取るように分かるんだ。好きになるってそういうことなんだね」

「……」

碧衣、今こそちゃんと話さなくちゃ。

「ごめん。大事なことを内緒にしていた…」

母国

照美が真顔になった。

「碧衣は訊かないの？ どうして僕が韓国からオファーが来たのか…」

「訊かないよ。照美が話したくなったら話して？」

「いや、今言うよ。碧衣に隠し事はしないと決めた。韓国は……僕の母国なんだ」

少しうつむく照美。

私は何も言わずに照美を見詰めた。

チェさんの話を聞いて、うすうす感づいてはいた。

わかってくれるよね。私は何を聞いても驚かないと言った。私の心はそんなことで変わったたりしない。

「碧衣？……」

「私、キムチもビビンバもチヂミも好きだよ。韓国料理のレシピも全部覚えるよ。ハングルは分からないけど、これから勉強する。何なら今から韓流ドラマにハマるよ？ 韓国は徴兵制度があるから、もしも照美が軍隊に入っちゃったら嫌だけど…」

そう言った私を見て、照美はくすくすと笑い出した。

「何で笑うの？私は冗談抜きで言ってるのに！好きな人と同じでいたいんだよ？…」

「うん、もちろんそんな風に言ってもらえるのは嬉しいよ。でもめちゃくちゃ話が飛ぶなあって思っ。そこが可愛くもあるんだけど」

本気でおかしそうに笑っている。

「何それ、変な言い方！私はね、照美がどの人でも気持ちは変わらないって言ってるの！」

そう、どこの人でも。なに人でも変わらない。照美は照美だから。

「碧衣。ごめんね、茶化すつもりはないんだけど。碧衣が面白いから少し気が楽になったよ」

「面白くないっ」と言って私は照美に抱きついた。

「私、ずっと傍にいるから。出会った日から今日までの分もずっとね」

目を閉じると、なぜだか一筋の涙が頬を伝った。
胸が締め付けられるほどに苦しくて、いても立ってもいられない
ほどに、気持ちばかりが先走って。何もかも上の空で。

あの日の夜からずっと、私の頭の中には照美しかいなかったんだ。

「碧衣、ありがとう」

照美は穏やかに微笑んだ。今までに見たこともないような幸福に
満ちたその笑顔に私は癒されてゆく。

そうして、私たちはもう一度キスを交わした。

触れ合っていると、まるでお互いが一つに解け合って行くようで
安心する。

照美の肩に頭を乗せた私は、その透けるような肌の内側で打つ鼓
動を感じ、穏やかで確かなこの瞬間に身を委ねた。

この不思議な気持ちは一体なんだろう…。今までに感じたことの
ない安らぎと幸せが、身も心も甘く溶かして行く。

これが恋というものなんだね。照美、私を好きになってくれてあ
りがとう。

私は抱きしめた腕に力をこめた。

「…痛っ」

照美が顔をしかめた。パジャマの上着の下に硬いものがある。

「何これ？」

「バストバンドだよ。肋骨が折れてるんだって。鍛えなおさないかね」

照美はバツの悪そうな顔で頭をかいた。

「大丈夫…？痛いのか？」

「大丈夫だよ。痛くない」

そういつてまた微笑む。

「うそつき」

深夜

「見張ってるとか言ってたくせに、眠っちゃった」

僕は、イスに座ったままベッドに伏せて眠る碧衣の髪をそつと撫でた。

困ったな…こんな姿勢で寝てたら身体が痛くなっちゃうよ…。

ごめんね、碧衣。たくさん心配させてしまったんだね。

韓国へ行くこと、最初に僕の口から話せなくてごめん。

いきなりチャンスウから知らされて驚いただろうな。

碧衣は一緒に来てくれると言った。

でも、やっぱりそれはできないよ。僕たちはまだ中学生だから。

大好きな人…。もしも離れても、心は君の傍にいるから。

☆

★

☆

はっと顔を上げた。遠くから足音が響いてくる。

深夜の見回りだろうか？私は咄嗟にベッドの下にもぐりこんだ。

ガラガラッ

戸が開く音。続いてライトの強い光がこちらを照らした。

コツコツ

足音が近づいてくる。部屋に入ってきたようだ。

ベッドのすぐ脇まで来た。突然、枕元のライトが光る。

カ。
どうしよう！見つかる！トイレに隠れば良かったのに、私のバ

ガサガサ……

どうしよう、何をしてるんだろう？お願い、早く行ってよお。

ガラガラッ

だ。
ビクビクしている私には気づかずに、見回りは帰っていったよう

私はホッと胸をなでおろした。静まり返った部屋に私の動悸が響きそうなほど、心臓がドキドキしていた。

見つからなかったみたい。

ベッドを見ると、照美は静かに眠っていた。

良かった、いた…。

もしかしたら、私が眠ったら本当にいなくなってしまうんじゃないかと思った。

時計の針は午前三時を指している。

枕もとのライトを点けてみる。そこだけぼんやりと仄明るくなった。弱い灯りに照らし出された寝顔に、思わずウツトリと見入ってしまう。

照美…。睫毛長いなあ。見とれちゃうよ。一晚中見ていたいな。これが私を好きになってくれた人だなんて。

私、すごく、すごく幸せだよ。言葉では言い尽くせないくらい嬉

しいよ…。

照美？人を好きになるって不思議なことだね。私が好きになったあなたが、ずっと私を好きでいてくれたなんて。私の知らない間も、私を思っていてくれたなんて。

あの日、照美が言ったこと、忘れてないよ。『僕はただ一人の人を好きでいられたらそれでいいし、その人から同じように好きだと思ってもらえたら幸せだよ』

私に起こったこの奇跡が、どうか永遠に続きますように…。

「照美、私を置いていかないでね」

私は照美の指に自分の指を絡ませた。
そうしてもう一度、幸せの余韻に浸りながら眠りについた。

退院

朝、目が覚めると見慣れない天井。

え？あれ？

なんと、私は照美のベッドに寝かされていたのだった。

「え？うそ？照美どこ？」

慌ててあたりを見回す。すると、点滴スタンドごと移動した照美がソファで眠っていた。

「うそ、やだ、照美…冗談でしょ？」

そこに突然、さわやかな音楽と起床時間を告げるアナウンスが流れ始めた。

『おはようございます、6時です……』

「え？やばい、照美！起きて！起きてったら！」

「ん……ああ、碧衣おはよう」

「おはようじゃないよ。何やってるの？こんなところで寝て！……私
のこと、ベッドに運んだの？」

「うん。だって女の子をイスに寝かせるわけにはいかないでしょ」

「私なんていいのに……。それより大丈夫なの？身体」

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ、鍛えてるから」

そのとき、廊下を近づいてくる足音がした。

トントン……

照美は「来たよ、隠れて」と小声で言うと、私がトイレに駆け込むのを見届けてから……多分、澄ました顔で「はい」と応答する声をした。

「痛みはとうですか？昨夜点滴2本したからだいぶ楽なんじゃない
？」

「はい」

「じゃ、ちょっと湿布を交換するわね」

ガサガサ、ゴソゴソ……

照美と看護師さんの声だけが聞こえる。

「どう？ 大分痛みは楽になってきたんじゃないかしら」

「はい、おかげさまで」

「今日は午前の外来で診察をして、異常がなければ退院ね」

「わかりました。今までお世話になりました」

「どういたしまして。家に帰ってもちゃんとお薬飲むのよ？ それと、運動は完治してからね」

「はい」

ガラガラ

出て行ったようだ。

「碧衣、出ておいで？」

「照美、大丈夫だった？」

「大丈夫、大丈夫！そんなに心配しないで」

診察の結果、照美の身体はここ二日の間にかなり回復していることがはっきりした。そして、その日の午前中には予定通り退院できることになったのだった。

主治医と看護師はすごい回復力だなあ…と苦笑いするやら関心するやらだったらしい。

『痛み止めを処方しますから、退院してもしばらく通院してくださいね。まだ骨はくっついてないんだから運動はしないでね』と念を押され、照美は退院手続きをした。

「ね、だから言ったでしょ？」

照美は得意満面で『どう?』という笑みを浮かべた。

アパートへ帰る

病院を出ると、エントランスで待機中のタクシーに乗り、とりあえず姉のアパートに照美をつれて帰ることにした。

アパートにつくと…。

あまりにも予想通りの姉の反応に、つい笑ってしまう。

「何？誰なの？そのとんでもないイケメンは！」

「え？何？碧衣の彼氏なの？まじで？うわぁ……すごいね、君、美少年だねー」

姉は私と照美の顔を交互に見比べた。

「はじめまして、亜風炉照美と言います。突然お邪魔してすみません」

照美は、『あはは、どうも…』と困ったように愛想笑いをする。

姉はリビングの隣の和室に布団を敷いてくれた。

「君、今日退院だったんでしょ？ここに横になっていいよ」

照美はすいません、と恐縮しながら和室に入っていった。

私達は、小さなダイニングテーブルに向かい合って座った。姉の入れてくれたコーヒーが柔らかい湯氣を立てている。

彼女の改まった態度に、照美のことを訊かれるのかと思ったが、そうではなかった。

「ねえ、碧衣。聞いた？お母さんから」

「え？何を？」

「そっか、碧衣はおとといからこっちに来てたし、昨日帰ってこなかったから知らないんだ」

姉は『昨日帰ってこなかった』と言う部分を強調した。

「…ごめん、だまって外泊して」

「いいよ、病院にいたんでしょ？お母さんにはちゃんとうちにいてって言うておいたよ」

「助かる！で。お母さんの話ってなに？」

「お父さんのこと。名古屋から帰ってくるって」

父は単身赴任や出張が多く、あまり家にいない。そのため父が帰ってくるというのは、うちではちょっとした話題だった。

「いつ？」

「来週の月曜日」

「でね、今度は海外なんだって」

姉はそういうとコーヒーに口をつけた。

「海外！？韓国？」

「え？……なんで知ってるの？」

驚いた姉は、コーヒーを慌てて飲み込んだらしく、小声であちちつと言った。

「うそ……本当に韓国なの？」

「なんだ、知ってるんじゃないの。じゃなんで韓国？……」

私は急にドキドキしてきた。

父が韓国へ行く……。

照美が韓国へ行く……。

これは神のイタズラなのだろうか。

こんな偶然ってあるの？信じられない。

「お父さんて出張ばかりだけどさ、海外は初めてだよね。韓国か
ゝ。ちょっと行ってみたいなあ」

姉は遠い目をして言った。

「韓国のどこ？」

「ソウルって言ってたよ」

韓国……。いまひとつ実感できなかったことが、急にわが身に迫
ってきたように感じた。

和室をそつと覗くと、照美は眠っているようだった。

お願い

「碧衣、彼、どうするの？同じ学校の子なんでしょ？家まで連れて帰れるの？明日は月曜だから学校あるでしょ？」

「それなんだけど…退院してもしばらく通院するんだって。一週間くらいここに置いてもらえないかな？」

私は懇願するように言った。

「え？彼を？」

姉は目を丸くする。

「あ、私も一緒に」と、慌てて付け足した。

「あんたたち、学校どうするのよ？」

「一週間くらい大丈夫だよ」

「うーん……義務教育をサボる気ね？」

姉はしばらく考え込むように黙ってしまった。

「よし、いいわ。お母さんには高熱出して動けないからしばらくこ
つちで看病するとしても言っておいてあげる。恩に着なさいよ?」

「え? いいの? マジで?」

さすがお姉ちゃん、物分りの良い姉を持った私はなんて幸せなん
だ!

「いいわよ。一週間くらいならあんたたち二人くらい養ってあげる
わよ。面白そうだし」

そう言うと、姉はニヤリとした。

「面白そうって……お姉ちゃん…」

「だって面白いじゃない。妹の恋を間近で観察できるなんて。しか
もその彼氏がものすごい美少年ときたら!」

私は自分で赤くなるのがわかる。

悔れない。一瞬でも感謝したことを後悔した。

「か、観察っ? お、お姉ちゃん、変な想像しないでよね!」

なんか私、声が裏返ってるかも…。

「へえ〜？変な想像されるような心当たりがあるわけ？」

姉は容赦なく突っ込んでくる。

「かつからかわないでよっ。ないよ、そんなのあるわけないじゃん！」

「あゝあ、赤くなっちゃってえ。その様子だとエッチはまだなのか？キスくらいはした？」

「知らない！」

もうやだ、恥ずかしいよ。お姉ちゃんのイジワル！

どこかに隠れたくなって、でも隠れるところがなくて…私は行きたくもないけれどトイレに逃げ込んだ。

「いいね〜いいねえ！初々しいね！いちばん輝ける時代だよ。しっかり彼を捕まえておきなさいよ」

そして姉は、稀に見る美少年だし…と付け加えた。

その日の夜は、姉が『せっかくだから退院祝いでもやろうか！』
と言ってくれたので、その言葉に甘えることにした。

遠恋

「碧衣、手伝いなさいよ」と言われ、私も姉と並んでキッチンに立つ。

照美は「僕も何かお手伝いしますか?」と言ってきたけれど、姉は「君は病人なんだから寝てなさいよ」と返した。病人じゃないんだけれど。

照美は手持ち無沙汰で、そばにあった新聞を読み始めたのた。

「マトモにお料理するの久しぶりだから嬉しくなっちゃうな」

姉は本当に嬉しそうな様子だった。

「マトモにつて、お姉ちゃん、いつも何食べてるのよ?」

「テキトーだよ、テキトー。1人だとさ、張り合いなくてねー。何でもいいやって思っちゃうんだよね。碧衣やお母さんもいないし、彼氏とは遠距離になっちゃったしさー。一緒に食べてくれる人がいないってさみしいよ」

「そうなんだ…」

それで、なんだか嬉しそうだったのか。

「碧衣、遠恋だけはやめておきなよ。なんかさ…続けていく自信なくすよ」

「そうなの？自信なくしてるの？」

「ていうか…会えない時間は愛を育てたりしてはくれないって思う。私たちってさ、高校が一緒だったから毎日顔合わせてたんだよね。それが、今は全然だよ？こっちきてから会ったのは数回で、あとはメールと電話だけ。これってマジでキツイよ」

そういった姉は、本当に複雑な表情だった。

そうなのかな。遠距離恋愛って、やっぱり難しいのかな……。

照美の方を見ると、相変わらず新聞を読んでいるのだった。

食事が終わると姉は缶ビールを呑み始めたので、照美にお茶を淹

れた。

「碧衣もちよつと呑む？あ、照美くんは病人だからダメよ」

「私だって呑まないわよ、未成年に勧めないでよ。ていうかさ、お姉ちゃんだって未成年でしょ。いつも1人でビールなんか飲んでるの？オヤジくさい…」

「オヤジいうな！寂しいオンナは手酌でお酒を飲むんだよ」

そういいながら4缶目を空けるころには、管を巻くようになっていた。

姉は照美に絡み始める。

「照美くんは部活何やってるの？」

「サッカー部です。僕、病気じゃないんですよ。サッカーで怪我したんです」

「あ、そうだったんだ。大丈夫なの？」

「ええ、まあ…。早く退院できたし、先生にも回復が早いって言われました」

「そっか、良かったね。ゆっくりしてっいいからね」

何がゆっくりしてっいいからね。義務教育をサボる気ね、とかナントカ言ってたくせに。

絡む姉

「得意な教科は？」

「ねえ照美くんてさー、キレーな顔だねー」

「君さー、学校でもてるでしょ？」

「うそうそ、絶対もてるよねー？ねえ碧衣？」

姉は一方的に照美に話しかけ、照美は「はあ」とか「ええ」とか、「いやあ」などと相槌を打ったり、時には答えたりしているのだった。

「何回告白された？」

「あ、何十回とか？もったかな？」

あ……なんか怪しくなってきた。

「ちょっと、お姉ちゃん！？」

私がビールを取り上げようとすると、彼女はそれを上手くかわして……サラリと言った。

「碧衣が初めてなの？」

「っ……………！」

思わずお茶を嘔いてしまう。

「ぶわっ！ええっ？ちよっ、ちよっとお姉ちゃん、何言ってるのよ、呑みすぎ。もうお酒終わり！」

私は姉がおかしなことを言い出す前にビールを取り上げた。すでにおかしなことを言っているが。

「酔ってないわよ、ビール2本くらいで。返しなさいよ」

「酔ってんじゃん、ビール2本じゃないでしょ？4本でしょ！」

「ええー？そうだっけえ？」

すでに目が据わっている。

「もういいから寝て！」

そう言うと、姉を引きずるようにベッドへ運んだ。

「ごめんね、照美。変なお姉ちゃんで」

姉がいなくなると、途端に静かになった。

お茶でも淹れ直そうかと思っていると、照美がポツリと言った。

「碧衣…僕も寝ていい？」

「え……うん」

姉に突然あんなことを訊かれた照美は、なんだかいつもよりテンションが低かった。

そういえば、食事中も何やら考え込んでいるようだったな……。

私は、二人がいなくなったキッチンでもくもくと後片付けをした。

照美の思い

和室に戻った僕は、布団に横になって碧衣が食器を洗う音を聴きながら考え事をしていた。

さっきの、碧衣とお姉さんの会話。

『碧衣、遠恋だけはやめておきなよ。なんかさ…続けていく自信なくすよ』

お姉さんの言葉が、何度も繰り返し僕の頭の中を回っている。

さっきからずっとそうだった。

僕は新聞を読むフリをしていただけで、少しも読んではいなかった。読もうとしても文字を目で追えなかった。

お姉さんの言葉が聞こえてきてからは、もうそれしか考えられなくなっていたから。

食事中もずっとそんな状態で。

だからお姉さんが、僕にいろいろ質問をしてきたけれど、マトモに答えられていたかどうかわからない。

気がついたら碧衣がお姉さんからビールを取り上げて、ベッドへ引きずっていくところだった。

僕は、碧衣には日本で待っていて欲しいと思う。

いつか帰ってくる日まで。

それがいつになるのかは分からないけれど。

普通に考えたら、韓国に連れて行くっていうのはちょっと現実的じゃない。碧衣にとっては全く知らない国だし、そこに滞在するとなればなおのこと。

でも……。

『会えない時間は愛を育てたりしてはくれないって思う。私たちってさ、高校が一緒だったから毎日顔合わせてたんだよね。それが、今は全然だよ？こっちきてから会ったのは数回で、あとはメールと電話だけ。これってマジでキツイよ』

僕のしようとしていることは、結果的に碧衣を苦しめることになるのだろうか。

今のお姉さんのように……。

お姉さんと二人きり

次の日の夕方、碧衣が夕食の買出しに出かけている間に、お姉さんが大学から帰ってきた。

「ただいま。あれ？碧衣、いないの？」

「はい、さっき買い物に行きました」

「ふうん、そっか」

お姉さんが部屋に入ってくると、ほのかにいい香りがして、僕は何故だかドキドキしてしまった。

お姉さんと二人きり……。

僕は少し身の置き所がなくて戸惑ってしまう。

「あの…突然お世話になってすみません」

「ああ、気にしなくいいわよ。一人でいるより誰かいたほうが楽しいね」

お姉さんは、少しイタズラっぽく笑う。その笑顔は碧衣ととても良く似ていた。

僕は思いきって聞いてみる。

「遠距離恋愛って難しいんですか？」

「あ……昨日の話、聞いてたの？」

ビククリしたような顔。

「……すいません、聞こえちゃいました」

「別にあやまらなくていいけど」

お姉さんは冷蔵庫から麦茶を出すと、僕に淹れてくれた。

「そういう予定があるわけ？」

するどく突っ込んでくる。

「え？」

「でなきゃそんな事聞かないでしょ？」

「……」

「ダメだからね。碧衣に私と同じ思いをさせるのは」

そこにいるのは、昨夜の酔っ払ったお姉さんではなく、妹を思う姉の顔をした一人の女性だった。

「僕は行かなくちゃならないところがあるんです。でもそこに碧衣さんを連れては行けない。いつ帰ってくるかは分からないけれど、待っていて欲しい。それはダメですか？」

「なんか…わけアリみたいだね。良かったら話してよ」



僕はいつまんで説明した。

自分が韓国へ行くこと。

碧衣と一緒にきたがっていること。

でも僕は日本で待っていて欲しいと思っている。けれど、そのことを碧衣に話せずにいること。

「なるほどねえ…。それで、碧衣はあるとき韓国って言ったんだ…」

「何のことですか？」

「ああ、ううん、こっちのこと」

「？」

「まあ、いいから。とにかく碧衣と一緒にきたがっているんですよ？ だったら照美くんは難しいこと考えずに、自分のことだけ考えてればいいんじゃない？ だってすごいよ、代表にスカウトされるなんて」

「そうでしょうか……」

「そうだよ、だって国の代表だよ？」

「いや、そうじゃなくて碧衣のこと」

するとお姉さんは、あきれたように笑う。

「照美くんてさ、代表にスカウトされたことは嬉しくないの？さっきから聞いていると代表になることより碧衣のことばっか気にしてるよね」

「……え？」

僕は思いもよらぬお姉さんの問いに驚いた。言われてみればそうかもしれない。

「碧衣は幸せだね。こんなに思ってくれる優しい彼氏がいてさ。ていうか、お姉さん的にはものすごく妬けてしまうんだけど」

考えたこともなかった。僕は優しいんだろうか？

「あのさ、少し気持ちを切り替えたら？そんな風に考えてばかり

いても前に進めないじゃない？ 碧衣を連れて行けないっていう君の
気持ちはわかったよ」

「でも……」

「でも本当は一緒にいたい。そうでしょ？」

「はい」

「答えの出し方は人それぞれで、正解なんてないんだよ。何が正しかったのかなんて、ずっと後にならないとわからない。多分、碧衣は君の出した答えに納得しないと思う。それなら碧衣が満足するような答えを探せばいいんじゃない？ 照美くんにはそれがわかるんじゃないかと思うけど？」

そういうと、また少しイタズラな顔をする。

「男はね、多少エゴイストなほうが魅力的よ。思いやりも大切だけど。まあ、君たちよりほんの少しだけ長く生きてるお姉さんからのアドバイス」

お姉さんのその言葉をきいたとき、僕は突然目の前が開けたような気がした。

「照美くんは顔に似合わずくそまじめだから少し頭も休めて、ちょっとうちのんびりしたら？」

「くそまじめ……」

お姉さんと話が出来てよかった。僕は僕の進む道が見えてきたような気がする。というか、最初から僕はそうしたかったのかもしれない。

「お姉さん、ありがとうございます」

「あ、こっち来てから初めて本当の笑顔になったみたい」

そのとき、碧衣が帰ってきた。

「ただいま。あ、お姉ちゃん、帰ってたの？照美、何かされなかった？」

「ちょっと！何言ってるのよ、何もしないわよ」

「だって、さみしいんでしょ？」

「妹の彼氏に手なんか出さないわよ！」

僕は思わず笑ってしまう。

今まで真剣に僕の話聞いていたお姉さんは、またもとの変なお姉さんに戻っていた。

新婚さん!?

火曜日。

姉は午前中から講義があると言って朝早くから大学に行ってしまった。

朝ごはんを済ませた私達は二人きりだった。

照美は最初の晩、随分元気がないように見えたけれど、何かが吹っ切れたようにすっかり元に戻っていた。

姉が『うちにあるものはテキトーに使っていいし、勝手に何か作って食べていいからね』と言っていたので、その言葉に甘えて勝手にコーヒーを入れてみたりする。

私がコーヒーを淹れていると、照美がキッチンに近づいてきた。

「ついこの間のことなのに、なんだかずっと昔のことみたいだ」

「何のこと？」

「ほら、碧衣の家にはじめて行った日のこと。あのときも碧衣は僕にコーヒーを淹れてくれたでしょ。それを思い出してたんだ」

照美は懐かしそうな顔で言う。

「でも不思議だな。碧衣とはずっとこうして一緒にいたような気がするよ」

「そうだね。おとといのことなんだよね、全部。初めてキスしたのも、朝まで一緒にいたのも。照美と再会してからまだ二日しか経ってないけど、考えたら…なんかすごいね」

二人の関係は急速に進んだな…なんて思う。

「こうやって、碧衣とずっと一緒にいたいな…」

あのときのように、照美はカウンターの向こうで微笑んだ。

「じゃあ、また一緒にお料理する？」

「新婚さんみたいに？」と、照美が笑う。

「そう！」と言って私も思い出し笑い。

「あのとき、照美が新婚さんとか言うから私すっごいドキドキしてたんだよ。何を作って何を食べたんだかわからないくらい、頭真っ白だった」

「ホントに想像してた？僕と碧衣の新婚さん」

「そんな先まで想像したわけじゃないけど。あのとき思ったの。照美を誰にも渡したくないって…。ほら、照美、好きな人がいるって言ったじゃない？それって私のことだと思ってなかったからさ。なんか…すごい切なかったな」

「そうなんだ。……僕は……したよ」

「ええっ？したの？」

「……だって、好きな人との未来って想像するでしょ」

そう言ったきり、照美は急に深刻な顔になってしまった。

「碧衣……」

照美は、私の傍へ来ると耳元に口を寄せてささやくように言った。

「碧衣。……………しよう」

「ええ！？」

今なに？なんていったの？何かすごいこと言わなかった？……

問い返す間もなく、私の唇は照美の唇に塞がれた。

それは、いままでにないくらい激しく、そのとき私ははじめて本当のキスを知った。

二人の舌は絡まり合い、求め合い……。

頭の芯がぼんやりとして、私の思考を溶かしてゆく。

次第に、私は何も考えられなくなっていった。

最終日

あっという間に一週間は過ぎた。

姉のアパートでの日々は平穏だったというべきか、波乱に満ちていたというべきか。

私と照美の間に大きな変化が訪れたことだけは確かだった。

「お姉さん、お世話になりました。助かりました」

帰る日の朝、照美は姉に丁寧に頭を下げた。

「いいのよ、元気になって良かった。碧衣の彼氏は私の義弟みたいなもんだからね」

照美はあはは、と照れくさそうに笑う。

「それじゃあ、ありがとう。迷惑かけてごめんね、お姉ちゃん！ちゃんと恩に着てるからね！」

「ばっかねー、あんなの冗談よ。それよりまた遊びにおいでよ。照美くんもね！」

そういった姉が、照美に向かって意味ありげな視線を送ったのを私は見逃さなかった。

……なんだ？今のアイコンタクトは。何か企んでいるんだろうか。

私達はタクシーに乗り込むと駅へ向かった。

「優しいお姉さんだね？」

「そう？」

「碧衣ともよく似てる。碧衣が大きくなったらあんな感じなのかなあって思った」

「似てるかなあ。自分ではあんまり思わないけど。しかもあいつは変人だし」

「似てるよ。それに本当は優しくていい人だと思うよ」

「うわっ照美、絶対騙されてるよ！」

「そんなことないよ。お姉さんて案外妹思いだと思うけど？」

「何？照美、何か吹き込まれた？」

駅に着くと、新幹線乗り場へ向かった。指定席の乗り場に並ぶ。

いくら照美の回復が速いといっても、やはり自由席ではかわいそう
だと言う姉が指定席のチケット代を出してくれたのだった。

仕送りとバイト代でやりくりしている姉にはちょっと悪いことをし
ちゃったかな？なんて思ったが、姉の楽しそうな顔を思い出し、た
まには甘えてもいいかなあ…なんて思いなおした。

静かにホームに滑り込んできた新幹線に乗り、照美と並んで席に座
る。

小さな冒険が終わってしまうような、少しだけ寂しい気持ちになっ
た。

最終回

目を閉じてみる。

姉のアパートでの日々を思い出す。

あの日、照美が私の耳元でささやいた言葉。

それはあまりにも唐突で、思いがけなくて、でもあんな気持ちは初めてで、心が甘い蜜で満たされていくような不思議な気持ちだった。

「ダメかな？」

「ダメなわけじゃないじゃん……」

私は笑って返した。けれど、少し泣いていたかもしれない。

「突然で驚いたよね。本当は、いつか遠い未来に言えたらいいなって思ってたんだけど……。碧衣に、お姉さんみたいな寂しい思いはさせたくなかったから、僕は好きな人との未来を今きちんと約束したい」

そして照美は続けてこう言った。

「私に韓国へはいかずに日本で待っていて欲しい」と。

「……いいよ。待ってる」

そこまで言われた私は、そう答えるしかなくて、多分また泣いていた。

寂しいけど、切ないけれど幸せで。でもそこに同居するのはもっと特別な感情。

やっぱり一緒には行けないんだね…。

でも大丈夫だよ。

照美のくれたひとは私に待ち続けるだけの勇気をくれたんだ。

きっと照美のことだから、いろいろ考えたり、悩んだりしたんだろうな。

そして、決めたんだと思う。

私に伝えたいことは、もっとたくさんあったのかも知れない。

でも、たったひとことで、私はあきらめるほど簡単に堕ちてしまった。

ヤラレタ！って感じ。

ふと、隣の照美を盗み見た。

長い足を組んで、ホームの売店で買った雑誌を読んでいるのだった。

私の視線に気づいた照美は、こちらを向くと「なに？」と言った。

「なんでもないよ」

何でもないけれど、ただ見ているだけで幸せなんだよ。

私は窓の外に視線を投げた。

姉の住む街、稲妻町が遠ざかっていく。遠くに稲妻総合病院が見えた。

全てはここからはじまった。

そして、私達は二人で一緒に歩きはじめる。

道は違って、きっとたどり着く場所は同じ。

遠い未来を待ちわびながら、照美の言葉を幾度となく心に思い浮かべるのだろう。

碧衣、いつか大人になったら結婚しよう……

F I N

最終回（後書き）

作者のn a g iと申します。

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました！
イナズマイレブン二次創作としては、初の私の作品です。

実は、この作品、別のサイトで夢小説として書いたものです。
ですから、主人公『碧衣』は本当は読者さまご本人なんですよ。

碧衣の気持ちに寄り添って読んでいただけましたでしょうか…。

ご感想、評価などいただければありがたいと思います。

また他の作品でもお会いできることを祈って…………

2010 11月吉日

n a g i

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7236/>

『You're my love』 イナズマイレブン二次創作

2011年7月26日17時53分発行